高山寺明恵上人七百年遠忌点描 2 ——原富太郎(三溪)——

Sankei HARA and Kōsanji - Temple

小林あづみ Azumi KOBAYASHI

概要:近代日本における実業家・古美術コレクターとして著名な原富太郎(三溪、1868年 - 1939年)と高山寺との関係について、絵画作品の点から考察した。三溪は高山寺の中興開祖である明恵上人の七百年遠忌(1931年)に、六祖慧能像を描き寄進した。その画は、彼が模写した高山寺所蔵の明恵上人像や高山寺印のある出山釈迦像と同様に、3点の特徴を持つ。

1.極度の苦行の跡を示さない 2. 冥想・坐禅する姿ではない 3. 光彩を放ち崇拝される姿ではない 彼の描いたこれらの仏教画は一種の自画像であり、シビアな生糸業界で得た人生観と蒐集した古美術の美によって洗練された仏教(美術)観のあらわれであった。それは当時の高名な禅僧たちも高い境地として認めるレヴェルに達していた。また、六祖慧能像に寄せた賛「本来無一物」を彼は心にとどめ、この語が具現化した長次郎作の茶碗「無一物」を入手し愛用した。三溪は、明恵上人や禅僧たちのように坐禅を行わなかったが、高山寺所縁の作品を手元に置き、模写し、自身の投影として画を描くことで高山寺や明恵上人を自らに近しいものとし続けていた。

Abstract: In this paper I examine the relationship between Kōsanji-Temple in Kyoto, Japan and Sankei HARA (1868-1939), who was a very successful businessman and well-known collector of antiquities in modern Japan. In 1931, Sankei painted the portrait of Huineng, the Sixth Patriarch of Chan Buddhism (Fig.2), and donated it on the seven hundredth anniversary of the death of the Buddhist monk Myōe who re-established Kōsanji. This painting and his reproductions (Fig.6 and 7) of the portrait of Myōe (Fig.5), owned by Kōsanji, and "Sakyamuni Descending the Mountain" (Fig.8), owned by Sankei and has Kōsanji signature stamp, have three elements in common:

- 1. No trace of extreme ascetic practice.
- 2. No contemplative or seated meditative figures.
- 3. No worshipped figures with halos.

These works are his self-portraits of sorts and the reflections of his life philosophy, which he had gained through his experiences in the silk industry, known as a "raging horse" because of the "bumpy ride" and the tough negotiations with foreign countries. They are also the reflections of his view on Buddhist art, refined by the beauty emanating from the antiquities he had collected. His life philosophy and view on Buddhist art had attained a level of mastery highly recognized by prominent hierarchs at the time.

The praise for his painting of Huineng states *Honrai Muichimotsu* ("Originally there is nothing"). As he kept this in mind, he bought and used a Red Raku tea bowl named *Muichimotsu* ("Nothingness").

Sankei neither attended the ceremony of the seven hundredth anniversary at Kōsanji in 1931, nor practiced seated meditation as Myōe and Zen Buddhist monks did. But he certainly continued to feel close to Kōsanji and Myōe by possessing art works which held a connection to Kōsanji, reproducing them and painting portraits as self-reflections.

キーワード:遺香庵、六祖慧能、本来無一物、縣治朗、大乗禅、長次郎茶碗、出山釈迦

Key words: Myōe, Huineng, Jirō AGATA, *Ikō-an* (Japanese tea house at Kōsanji-Temple), *Honrai Muichimotsu*, *Daijō-Zen* (The Mahāyāna Zen Buddhism), Red Raku tea bowl named *Muichimotsu*, Śākya-muni Descending the Mountain

はじめに

西の都にてよめる

老僧の登る坂路をのぼりゆけば夕雲やどる栂尾の寺原三溪『古人**迂**第一集』¹

本稿は1931(昭和6)年11月に京都栂尾の高山寺で営まれた、明恵上人(鎌倉時代の華厳僧、高山寺中興開祖)の七百年遠忌法要に付随した諸事業の関係者をめぐる資料を紹介するものである。筆者は前稿において、大久保利武、内藤湖南、堂本印象に関する資料を提示した²。本稿はそれに続き、近代数寄者(明治時代以降、実業界等で活躍した茶の湯愛好者。点前や作法にこだわらず、道具蒐集に力を注ぎ、結果として茶道具を美術・工芸として位置づけることになった³。)のひとりとして名高い原富太郎(三溪)の関与について資料を提示し、その画業の意義や芸術家たちとの関係、仏教への見解について若干の考察を加える。ただし、門外漢による調査報告のため、的外れな部分や遺漏が多いことも予めお断りしたい。

なお、資料の引用に際して旧字体は新字体に改め、踊り字は開いた。改行は/で詰めた箇所がある。年次の表記は原則として西暦に()内で元号を示したが、近い年次が続く場合、頻出する昭和5年から7年に関して、また茶会記録、入札目録、新聞記事については数字の見易さ、検索の便等を考慮し元号のみとした。主要な人名は原則として初出時に()内に号、社会的地位を注記し、再出以降は姓あるいは名のみで記したが、原富太郎に関しては「三溪」とされることが多いことを考慮し、「三溪」と表記した。参考図版として挙げた作品および略称で示した参考文献については、末尾に作品と文献のデータをそれぞれ示した。文中のウェブサイトの閲覧日はすべて2018年12月15日である。

1. 明恵上人七百年遠忌と遺香庵

前稿でも示した明恵上人七百年遠忌と遺香庵に関して、煩瑣ではあるが訂正を施しつつ再度概要を述べたい。遺香庵とは、明恵が栄西より贈られた茶を栽培し日本に茶が広がったという伝承から、昭和6年の明恵上人七百年遠忌の折に、高橋義雄(箒庵、三井呉服店取締役、王子製紙専務などを経て茶人として活躍)が総代となり、益田孝(鈍翁、男爵、三井物産社長等)をはじめとする近代数寄者たちが高山寺内に寄進した茶室のことである。高橋の記録⁴によれば、寄進の概要は以下のようなものであった。

- ①寄進者総代:高橋義雄 寄進世話方:土橋嘉兵衛(無 声庵、道具商)
- ②寄進者等:京阪神・東京・名古屋・金沢の数寄者等 103名と、東京茶道協会。加えて有志で遺香庵の常什 品を51名より73点寄進。費用と常什品とを寄進した者 は、益田夫妻、平井仁兵衛(東庵、呉服商、今日庵老分、 高山寺檀信徒総代)、磯野良吉(丹庵、大阪窯業社長等)、 富田重助(宗慶、名古屋鉄道社長等)、野崎広太(幻庵、 中外商業新報社主、三越百貨店社長等)等16名
- ③茶室建設:「後来当山に参詣する幾多の道俗に対して、 当山所産の抹茶を供養すべき道場」として建設。木村 清兵衛による建築、小川治兵衛による作庭。昭和6年6 月より工事開始。天井の棹縁、落掛、炉縁、扁額(鈍 翁の揮毫)は高山寺古材。梵鐘:茶恩鐘(高橋鐘声堂、 寄進者名を彫刻)
- ④茶室披き:昭和6年11月11日 濃茶席受持:高橋義雄 (薄茶席(於 高山寺石水院)受持:野村徳七(得庵、 野村財閥創始者))
- ⑤本席飾付等(高山寺や明恵ゆかりの品のみ記載する) 床:明恵上人自画讚竪幅⁵

「高尾草庵ニコモリヰルニアル人ノココロサシトテ花 立ヲオクリタモウニ 云々⁶ 咲花もすかたもおなし ことわりにをりいれてみよ人のこころを」

茶碗:中興名物 銘「小塩井戸⁷」、箒庵好 銘「遺香」(替) 濃茶:栂尾産、銘「遺香」(柳櫻園詰製)

菓子: 箒庵好 日の出皿(鈍阿焼「日出先高山之寺⁸」 焼出)に日の出餅(道喜製)

- ⑥会計:103名より100円ずつ、また東京茶道協会より 100円寄進。収入10,400円、支出9,681円24銭。残金は 遺香庵維持基金に充当
- ⑦関連事業:七百年遠忌記念展覧会を東京・京都・大阪 で開催。特に「茶の由来展覧会」(於 三越日本橋本店、 昭和6年11月10~16日) では遺香庵を会場に再現した⁹

三溪が関与した②のうち、特に遺香庵常什品の寄進者と その品々は、掲載順に一部抜粋すれば以下のようなもの であった。

・益田孝: 手造寸切竹花入 銘「松風」/手造茶杓共筒 銘「遺香」/沢庵遺愛松木地茶器 銘「たゆふ」

・野村徳七:自画兎の絵大土器皿5枚

・原富太郎:自画六祖搗米図(図2-1)

- ・富田重助: 好み物黄瀬戸平皿25枚
- ·田中親美¹⁰: 手造遺香庵常什寄進目録巻物
- ·前山久吉¹¹: 手造志野井戸形茶碗 / 手造瀬戸黒土茶碗 / 手造志野土狸香合
- ・高橋義雄:自筆五字一行物/手造茶杓3本(銘「栂山」「如意」「墨染」)/好み物茶入3個(銘「日出肩衝」「阿伽井柿」「石水瓢箪」)
- · 森川勘一郎¹²: 手造志野土松の絵茶碗
- · 益田多喜子¹³: 手造茶碗 銘「星月夜」
- ・仰木敬一郎14:手造茶碗 銘「むら時雨」
- ·大谷尊由¹⁵:自画遺香之図
- ・三井守之助¹⁶: 手造茶杓共筒 銘「時雨」
- ·平井仁兵衛:自画紅楓小禽之図
- ・関戸守彦17: 好み物木地溜塗茶入 明恵上人遺物写
- ・磯野良吉:伊賀土伽藍香合/吳洲銀杏香合/青磁三人 形蓋置
- ・野崎広太: 手造茶碗 銘「清滝川」

遺香庵の扁額を揮毫した鈍翁、茶室披きの折に薄茶席を 受持った野村の次に三溪は挙げられ、重んじられている ことがうかがえる。三溪は後述の略歴に見られるように、 近代日本の輸出業の要ともなった生糸業に携わり実業家 として多くの業績をあげたが、そのほかに、

- ①古美術品蒐集¹⁸:1903 (明治36) 年、井上馨 (世外、 伊藤内閣外相、蔵相等)より1万円で購入した「孔雀 明王像」(東京国立博物館蔵)が有名。質量ともに充 実したコレクションは5000点¹⁹以上といわれるが秘蔵 しなかったことでも知られる²⁰
- ②芸術家たちへの援助²¹:下村観山、安田靫彦、小林古径、前田青邨等への援助
- ③茶会:50歳を迎える頃より自らも茶会を催し、鈍翁、 松永安左エ門(耳庵、東邦電力社長、東北電気社長等) ら数寄者と親交を結んだ
- ④詩作、描画:幼少の頃より漢籍を学び、外祖父である 南画家、高橋友吉(杏村)の長男鎌吉(杭水)より画 も習った。それらの作品は『三溪画集』第一輯から第 四輯(全6巻)に収められる。高山寺に蔵される「鳥 獣人物戯画」(甲巻)の模写も行った²²
- ⑤作庭:自邸(三溪園)に由緒ある古建築群を移築し、 茶会を催し来客を接待したほか、一般にも無料開放し た。他に別荘等も数軒所持した

といった点でも注目される人物である。明恵上人奉賛会

メンバーとの関係について上記①から⑤の点から指摘す れば、会長である大久保利武とは、1939 (昭和14) 年に ベルリンで開催された「日本古美術展覧会」で委員長と 出品者として関わっている(①、2-1略歴参照)。大 久保の次兄、牧野伸顕は関東大震災時に大日本蚕糸会会 頭であり、三溪とともに復興にあたったほか、海外の古 美術愛好家への所蔵品公開依頼(①)や、竹内栖鳳や黒 田清輝、鏑木清方らとの会食(②)への招待といった三 溪宛書簡が残り、三溪園へ出向いてもいる(⑤)。弟の 大久保利賢は横浜正金銀行(東京銀行(三菱 UFI 銀行) の前身) の頭取を務めており、三溪とは牧野同様関東大 震災時の横浜復興等、横浜財界人として親交を結んだ。 明恵上人奉替会発起人のひとり内藤湖南も三溪園での茶 事に招待され(③・⑤)、三溪所蔵品の学術出版依頼(①) や三溪から贈られた書画(④)への礼状をしたためてい る23。また、上記の遺香庵寄進メンバーのうち、益田夫 妻・田中・前山・高橋・森川・野崎とは互いの開催する 茶会で顔を合わせる関係であり(③・⑤)、それ以外の 全員とは光悦会(本阿弥光悦の顕彰と光悦寺の興隆、記 念茶会開催を目的とする) メンバーとしてかかわりがあ る (③)。その他、高野山霊宝館建設(1912-1921(大正 元-10)年)、平家納経副本作成(1920-1925(大正9-14)年)、 佐竹本三十六歌仙絵巻分断 (1919 (大正8) 年) といった、 近代数寄者たちが集団で巨額を投じ古美術にかかわった 事業においても、三溪は明恵上人奉賛会メンバーと幅広 くつながりを持っていた²⁴。

本稿ではこのうちの④に焦点を当て、三溪が描いた仏教を主題とする絵画への高山寺所縁作品の影響、また従来言及されてきた②に加え、芸術家たちから得た助力について指摘し、仏教、特に禅に対する三溪の見解とその画業の意義を探る。

2-1.三溪と六祖

三溪自身は遺香庵の茶席披きやそれに付随する京都での茶事には、管見の限りでは参加していない。しかし寄進した一幅は、自らがその画を集成した『三溪画集²⁵』にも掲載され、忘れがたい作と考えてよいだろう。この作について検討する前に、まず三溪の略歴と六祖の伝記を以下に挙げる。なお、三溪の業績は前述のように多岐にわたる為、実業家としての経歴を中心とし、昭和6年の事跡と本稿にかかわる点についてのみ補足的に記載した²⁶。また、太字は高山寺や明恵、本稿にかかわる事跡である。

- 1868年(慶応4)8月 岐阜県厚見郡佐波村(現 岐阜 市柳津町)に青木久兵衛(後に久衛と改名、佐波村 戸長)・琴の長男として誕生
- 1885年(明治18) 4月 上京し東京専門学校(早稲田大学の前身)に学ぶ
- 1891年 6月 原屋寿 (横浜屈指の生糸商、原善三郎の孫 娘) と結婚
- 1899-1900年 善三郎逝去後、原商店を原合名会社に改組。順次海外に支店を設立
- 1902年 9月 三井家より富岡製糸場等を譲渡
- 1903年 井上馨より「孔雀明王像」一幅を購入
- 1906年 5月 三溪園(横浜本牧の自邸)を市民に無料公開
- 1907年 釈宗演 (楞伽窟、円覚寺派・建長寺派管長等) の計らいで東慶寺仏殿を三溪園に移築
- 1909年 高山寺印のある「観音」二幅を購入
- 1913年 (大正2) **賀茂社宮司松下家蔵の後鳥羽院御影、** 同宸筆等を購入
- 1914年 3月 後鳥羽院関係の蔵品等を『三溪帖』(所蔵 品図録。関東大震災により出版目前で焼失)に収録 するよう川面義雄(築山²⁷、冬山、莢山、木版画家、 複刻版画家)に依頼²⁸
 - 5月 三溪園への三重塔移築記念の茶事。(三溪園 内の**松風閣に後鳥羽院御影**) 客は高橋箒庵、田中親 美等
- 1915年 3月 帝国蚕糸株式会社(第1次)社長。第一次世界大戦による生糸暴落のため、救済措置としての組織。資本金100万円、政府助成金500万円を得て救済策を進め、目的を達成し6月に解散、助成金に純益167万円も加え政府に返納
 - 4月 第17回大師会²⁹ (於 碧雲台) にて禅居庵 の席を受持 (床に後鳥羽院御影、卓に宸筆2巻)
- 1918年 4月 三溪園にて第20回史学会大会。「観世音菩薩像」二幅(高山寺印のある像か)等の陳列³⁰
- 1919年 3月 **鳥羽僧正『覚猷光明儀軌』一冊を購入**。鳥 羽僧正覚猷は高山寺所蔵「鳥獣人物戯画」の筆者と かつてみなされた人物
- 1920年 4月 後鳥羽院本三十六歌仙絵(清原元輔)ー幅 を購入
 - 9月 帝国蚕糸株式会社(第2次)専務取締役。第 一次世界大戦後の恐慌による危機救済のための組 織。1923年3月に純益873万円をあげて解散
 - 12月 横浜興信銀行(横浜銀行の前身)の初代頭取。横浜七十四銀行の破綻を受け新設された銀行の

- ため、営利目的ではなく利益は七十四銀行の整理金 に充当
- 1923年4月 大師会(財団法人化後第2回)を三溪園にて開催。2日間に亘り約600名が来会
- 9月 関東大震災。横浜市復興会、横浜貿易復興会等の会長を務め、私財を投じ横浜の復興にあたる 1930年(昭和5)6月 『三溪画集』第一輯(第一、第二)刊行。自筆の書画を年代別に編纂した図版
- 1931年 1月 大谷嘉兵衛(製茶貿易業、第2代横浜商業 会議所会頭等)銅像除幕式にて式辞。三溪は大谷嘉 兵衛翁頌徳会会長

「鈍翁一日の卷」を描く

2月 西郷(三溪長女)邸にて茶事。客は益田孝(鈍 翁)、田中親美、森川勘一郎(如春庵)、伊丹(信太 郎か(揚山、三井物産を経て道具商)) 伊豆大島へ

- 3月 南風村荘 (伊豆長岡の別荘) へ
- 4月 後鳥羽院山陵参拝等のため隠岐等をめぐる
- 7月 去来山房(箱根芦之湯の別荘)へ
- 9月 前年5月の下村観山逝去をうけ、『観山遺作 集』乾・坤の出版。(乾巻末尾に「六祖(大鑑禅師)」 図4)三溪は扉字、佐伯定胤(法隆寺管長、明恵上 人奉賛会メンバー)は題字を揮毫
- 10月 翌月の明恵上人七百年遠忌に高山寺の遺香 庵へ寄進するため六祖慧能を描く。(図2-1)また、 遺香庵の寄進者総代となった高橋および遺香庵へ志 野茶碗を寄進し茶席披きに参加した森川に、明恵上 人像をそれぞれ描き贈る(図6-1)
- 白河関や中禅寺湖、日光戦場ヶ原等をめぐる
- 11月 明恵上人七百年遠忌法要。記念として高山 寺境内に寄進された遺香庵にて茶席披き。三溪寄進 の「六祖搗米図」(図2-1)等の展観
- 厳島、長崎、太宰府等をめぐる
- 12月 三溪園の建築群が当時の国宝指定をうける 1932月 2月 「六祖大師」(個人蔵、図3-1)を描き、縣 治朗に贈る
- 1933年11月 蓮華院(三溪園内) にて茶事。(床に後鳥 羽院本歌仙絵 元輔) 客は小林古径、速水御舟、川 面
- 1934年6月 長次郎作赤楽茶碗銘「無一物」(中興名物、『雲州蔵帳』記載)購入
 - 11月 高山寺印のある「釈迦」(図8) 一幅を購入 か³¹
 - 12月 金毛窟(三溪園内)にて茶事。(広間に高

山寺伝来古銅花盛器) 客は小林、速水、川面

1936年11月 蓮華院にて茶事。(**茶碗「無一物」**) 客は鈍 翁、森川、田中、仰木政斎(本名は政次、仰木魯堂 の弟、木工芸家)

1937年 2月 『三溪画集』第二輯 (第三、第四)、第三輯 (第 五) 出版。**第三の末尾に「明恵上人」「六祖」掲載** 3月 西郷邸にて茶事。(**茶碗「無一物」にて薄茶**) 客は松永安左エ門 (耳庵)、田中、仰木政斎、仰木 魯堂 (仰木政斎の兄、遺香庵寄進者)、中村富次郎 (中 村好古堂の婿、道具商)

5月 「出山釈迦」(図7-1)を描き、森川に贈る 1938年 5月 『余技』出版。所蔵品のうち、画作を本業 としない者が描いた作品を収録

1939年 4月 後鳥羽院七百年祭にあたり、後鳥羽院宸影幅、同宸翰等を皇室に献上³²

2月~3月 ベルリンにて「日本古美術展覧会」開催³³。日本側委員会会長は、大久保利武(明恵上人奉賛会会長)。「出山釈迦像」(図8)一幅・「観音菩薩像」 二幅(高山寺印あり 原屋寿蔵)等の出展 8月 逝去

1940年 8月 『三溪画集』第四輯(第六)刊行。三溪の 一周忌に次男良三郎が編集。冒頭に「出山釈迦」(図 7-1)掲載

1950年 4月 三溪遺墨展(於東京美術俱楽部)(**茶碗「無** 一物」にて呈茶)

1951年8月『三溪集』刊行。三溪の漢詩類を整理したもの

1955年 夏 遺香庵にて「**原三溪筆六祖図」(図2-1)**を 掛けた茶事を小川義章(当時の住職)が行う。客は 田山方南(本名は信郎、文化財調査官、松永記念館 館長等)ほか³⁴

1961年7月 三溪遺墨展(於 神奈川県立図書館)(「六 祖大師」(昭和7年 個人蔵、図3-1)出展)

遺香庵寄進の作の画題となった「六祖」(慧能)は、 禅の初祖達磨から六代にあたり、中国における禅の礎と なった人物とされる。また、彼の偈の一節として広まっ た「本来無一物」の語は、禅宗寺院のみならず茶席にも しばしば掛けられ親しまれている。一例を挙げれば、近 代数寄者のひとりとして三溪と並び称される鈍翁も、一 山一寧の墨跡「六祖偈」(「本来無一物」を含む)を愛用 したことが知られている。。明恵自身は神護寺や東大寺 と深いかかわりを持ち、華厳と真言を修した僧侶であっ たが、その姿を描いた著名な「明恵上人樹上坐禅像」(前 稿図4)にみられるように、華厳禅36的修行を重ねた。そ のため明恵教団では華厳と禅の融合が図られ、後世広く 流布した明恵の伝記(『明恵上人伝記』)も現在では禅家 の関与が指摘されるような内容であった³⁷ことから、明 恵と禅との関係は後述のように非常に深いと当時はみな されていた。さらに、明恵上人七百年遠忌事業は法隆寺 管長の佐伯定胤をはじめとする各宗の協力の下催行され た38。従って、華厳一真言僧の寺院の境内に寄進された 茶室に、禅の祖師が描かれた軸物を寄進するのは、当時 としてはさして奇異なものではなかったと考えられる。 ただ、茶人として名高い他の寄進者たちの画(野村「兎 の絵」、大谷「遺香之図」、平井「紅楓小禽之図」)や道 具の銘は、高山寺(紅葉、栂山、日出、阿伽井、石水、 清滝川) に蔵される「明恵上人樹上坐禅像」(前稿図4、 松のもとでの坐禅像)、「鳥獣人物戯画」(兎) あるいは 遺香庵に由来するものである。例外として益田夫妻の「た ゆふ」と「星月夜」があるが、鈍翁は「たゆふ」(=太夫) 銘の茶道具を多く制作させており39そのなかで禅者であ る沢庵⁴ゆかりの松の茶器を選んでいる。また、多喜子 の「星月夜」は、恐らく釉薬の斑文を星空に見立てたも のであろうが⁴¹、或いはまた(明恵同様)耳を切り、宗 教性と自然とをテーマとしたファン・ゴッホの作品と重 ね合わせたかとも思われる42。何らかの形で高山寺を連 想させる作を寄進した彼らと比べると、自身の画業にプ ライドを持っていた⁴³三溪の作は、他の寄進者とはいさ さか狙いが異なるように見受けられる。

なおここで、六祖慧能(恵能が古来の表記だが、流布 する表記に従う) についてもまとめておくが、慧能の伝 記は文献によって相違する4。例えば前述の「本来無一 物」は、悟境の偈(後述)によって慧能が六祖にふさわ しい器と認められたことを主張した『六祖壇経』系諸本 のうち、最古とみなされる敦煌本には記されていない ことが現在では広く知られている。(敦煌本『六祖壇経』 自体が南方で改変されたものであり、慧能自身の偈は「本 来無一物」であるとする見解もある)この敦煌本『六祖 壇経』は矢吹慶輝 (隈溪、大正大学教授) が1922-1923 (大 正11-12) 年に大英博物館で発見し1928 (昭和3) 年に『大 正新修大蔵経』巻48に収録、1930(昭和5)年に写真版 を公刊している⁴⁵。また、既に大正年間には松本文三郎 (京都帝国大学教授、明恵上人奉賛会メンバー) が従来 唯一のテキストであった『明版大蔵経』所収の『六祖壇 経』に疑念を呈して徹底批判を加え46、更に昭和7年に

は「六祖壇経の書誌学的研究」を公刊し⁴⁷、歴史上の六祖を明らかにしようとした。鈴木大拙(本名は貞太郎、大谷大学教授等)もまた、敦煌の禅文献によって新たな禅思想史を構築し、興聖寺本『六祖壇経』の公刊⁴⁸(1933(昭和8)年)、『大正新修大蔵経』所収の『六祖壇経』の新校訂⁴⁹(1934(昭和9)年)等を行っている⁵⁰。つまり明恵上人七百年遠忌の前後は、慧能をはじめとする禅の祖師たちについて歴史的事実の究明の機運が高まった頃であった。昭和6年4月の大師会にて牧谿筆「五祖」像が2点展示された⁵¹のもこの影響かとも考えられなくはない。ただ、三溪がこのような動きを実際のところどの程度把握していたかは不明である。そのため三溪作に整合する内容を以下に挙げる⁵²。

慧能(諡号は大鑑禅師、638(貞観2)年-713(先天2)年)は、新州(広東省新興県)出身の禅僧で、中国禅宗(南宗)の第六祖とされる。父を早くに亡くし、柴や薪を売って母親を養った。ある日、町で『金剛般若波羅蜜経』の読誦を聞いて心が明らかになり、**蘄**州(湖北省)黄梅県憑茂山の五祖弘忍の下に参じたが、行者として米つきに従事した。弘忍は門人たちに、体得した境地を偈にあらわすよう求め、優れた者を後継者とすることを提案した。門下首座の神秀が壁に偈を書いたが、弘忍は認めなかった。それを聞いた慧能が神秀の偈を超える偈を作り、弘忍より嗣法した。神秀の偈は

身是菩提樹 心如明鏡台 (身は是れ菩提樹 心は明鏡の台の如し) 時時勤払拭 勿使惹塵埃 (時々に勤めて払拭し 塵埃を惹かしむる勿れ) というものであり、慧能の偈は 菩提本無樹 明鏡亦非台

(菩提本より樹無し 明鏡もまた台にあらず) 本来無一物 何処惹塵埃

(本来無一物 何れの処にか塵埃を惹かん) と伝わる。

神秀の偈は、この身体は菩提(悟り)の実を結ぶ樹のようなもので、心も本来清浄で明鏡の台のように安定したものである。つまり、仏性/悟りの智慧は誰にも具わっているが、それを覆う煩悩という塵を払うよう勤めなければならないとし、順々に修行し仏性/悟りの智慧へと向かう漸修の立場を表明したものである。それに対して慧能の偈は、仏性/悟りの智慧には樹や台のような基体はない、本来空(無一物)であるから、煩悩という塵をつけるところがないとする。つまり、ただちに仏性/悟

りの智慧を明らめることが出来るとする頓悟の立場を主張している。弘忍より衣鉢を継いだ慧能はその後広州(広東省) に帰り出家、曹渓山宝林寺に移り、713(先天2)年に示寂するまで布教を続けた。その説法は『六祖壇経』として編集され、広く伝わった。

以上のような経緯によって、禅は『金剛般若波羅蜜経』などに説かれる空思想に影響された知的傾向、また作務を重んじる傾向を強めたとされる。このような転換を体現した(とされる)人物を三溪は採りあげたのである。

2-2. 「六祖搗米図」(図2) 製作の背景

三溪は仏教美術を多く蒐集し、社寺を三溪園内に移築 したことが知られているが、仏教の中では特に禅とのか かわりが多かったことが知られている。それは養祖父に あたる原善三郎が横浜の円覚寺別院の信徒総代であった ことから、円覚寺派管長をつとめた釈宗演(楞伽窟)を はじめとする円覚寺の諸師と原家とは親交をもった53こ と、また三溪と同郷の出身で、古美術および海外との取 引、関東大震災復興において深くつながりを持った野村 洋三(三籟、サムライ商会設立、ホテルニューグランド 会長、横浜商工会議所会頭等)も、円覚寺の諸師や臨川 寺(天龍寺内開山堂、三溪は隣に「隣花庵」を営む)住 職等を務めた間宮英宗(青龍窟、方広寺派管長等)と昵 懇の間柄であったこと等が背景にあると考えられる⁵⁴。 具体的には、「鹿山三宝会」(円覚寺の維持資金積立を目 的とする)の発起人のひとりとなったこと55、東慶寺仏 殿の三溪園内への移築(2-1略歴参照)等⁵⁶を挙げる ことができる。

ただ、三溪が遺香庵に六祖慧能の画を寄進するうえで強い影響を与えたのは、禅僧ではなく芸術家の縣治朗であった。縣は、遺香庵への什物寄進者のひとりである田中親美の娘婿として、田中と共に古美術の模写等に携わった人物である。三溪とは「古美術研究会」で大正年間の初めより関東大震災まで毎月古美術批評を行う関係であり⁵⁷、また三溪主催の茶事にしばしば招かれたことが知られる。以下にまず縣宛の三溪書簡(昭和6年10月26日付、個人蔵)を紹介する⁵⁸。(図1-1~図1-4)

【翻刻】(() 内は所蔵者による翻刻)

図1-1

十月廿六日 / 拝啓仕候過日ハ大乗 / 禅二部御送付被下 / 御厚意難有存読仕候 / 以御蔭六祖大師の歴史 / 概略承知 仕旦菩提 / 本無樹の偈も拝読 / するを得大二利益を得 / 申候御礼申上候 / 然ルニ右大乗禅の内云 / 賊後弓など申

図1-1 原三渓書簡(懸治朗宛、個人蔵。図1-2以下も同様)

 $2 \ 1 - 2$ $2 \ 2 \ 1 - 3$ $2 \ 2 \ 2 \ 2$

素人 / ニも解し易き講話 / 有之大ニ面白く候 / 此内画題も往ニ散 / 見仕候今暫時拝 / 借願置度候先ハ御 / 礼可申上候 / 草々 / 三溪 / 縣様

図1-2

以御蔭六祖大師米搗 / きの画も数十葉改写 / 仕漸く出来 仕讃ハ例 / の本来無一物の偈を / 書き申候尚此次ニハ / 五祖ノ伝ハ無之候哉伺申候

この書簡からは、縣が三溪へ六祖に関する資料を送った こと、三溪は六祖が米を搗く画を写したこと、更に五祖 への興味を持ったことが判明する。(4月の大師会におけ る五祖の作品展示が念頭にあったか)次に書簡を受け 取った縣の略歴を三溪との関係に焦点をあてて挙げる59。

1897年 (明治30) 2月 長野県松本市にて誕生。本名は 治郎吉

1918年(大正7) 田中親美に入門

1920-1925年 「平家納経」副本作成(田中とともに)

1926-1931年 「源氏物語絵巻」(徳川本)副本作成(田中とともに)

昭和初年 小林古径に師事か

1929年(昭和4) 3月田中の依頼により三溪は自筆画「一指頭(布袋)」を縣に贈る

1931年 三溪に六祖慧能に関する資料を送る

横山大観「紅葉図」六曲一双(第18回院展出品、

図2-2 原三溪「六祖搗米図」(高山寺蔵、部分)

図2-1 原三溪「六祖搗米図」(高山寺蔵、部分)

足立美術館蔵)の白金砂子切箔野毛仕上げ 1932年 2月 **三溪より「六祖大師」を贈られる**

10月 西郷邸 (三溪園内) にて三溪茶事。客は縣のほか高橋箒庵、田中、川面義雄、中村好古堂(本名は富次郎、道具商)

1933年 1月 南風村荘 (伊豆長岡の三溪別荘) にて三溪 茶事。客は縣のほか小林古径、速水御舟、川面

1935年 4月 聴秋閣 (三溪園内) にて三溪茶事。客は縣 のほか田中、川面

12月 三溪主催の忘年会(於 ホテル・ニューグ ランドか)に招待か。客は縣のほか田中、伊丹(信太 郎か、道具商)、外狩顕章(素心庵、美術評論家)、中 村等

1936年 9月 寒月庵(三溪園内)にて三溪茶事。客は縣 のほか松永安左エ門(耳庵)、丸岡與三次(耕圃、作 庭師)、田中、中村

11月 蓮華院(三溪園内)にて三溪茶事。客は縣 のほか小林、安田靫彦、前田青邨、川面

横山大観「野の花」二曲一双(第23回院展出品、 永青文庫蔵)の金砂子野毛仕上げ

1937年1月 南風村荘へ招待か。客は縣のほか小林

7月 三溪筆の龍虎屏風感服会。客は縣のほか田 中、中村、野村(洋三か⁶⁰)等

5月 春草廬(三溪園内)にて三溪茶事。客は縣 のほか田中、仰木兄弟、川面

8月 月華殿(三溪園内)にて三溪長男善一郎追 善茶事。客は縣のほか小林、前田、川面

10月 春草廬にて三溪茶事。(琳派の会)客は縣のほか松永、田中、仰木兄弟、中村、伊丹信太郎(揚山)、川面

11月 蓮華院にて三溪茶事。客は縣のほか井上三郎 (無外、侯爵、貴族院議員)、田中、中村

1938年 1月 春草廬にて三溪茶事。客は縣のほか松永、 田中、森川、川面、仰木政斎、中村

4月 西郷邸にて三溪茶事。客は縣のほか松永、 田中、仰木政斎、川面

6月 村雨亭(臨春閣内か)にて三溪茶事。客は 縣のほか井上、松永、田中、仰木兄弟、中村

11月 西郷邸にて三溪茶事。客は縣のほか松永、 田中、仰木兄弟、川面、中村

この頃、田中のもとより独立か

1939年 4月 臨春閣(三溪園内)にて三溪茶事。(三溪 最後の茶事となった)客は縣のほか松永、田中、小林、 安田、前田、仰木政斎、仰木魯堂夫妻、川面、中村 9月 仰木魯堂邸にて三溪追福の茶事。客は縣の ほか松永、田中、安田、小林、前田、川面、矢代幸雄、 中村、仰木政斎

12月 陽明文庫の第一回展観(於 東京府美術館、明恵上人消息等の出陳)に田中と出向く

1942年11月 三溪園銀杏供養。客は縣のほか井上、松永、 仰木政斎、田中、矢代、中村

1945年5月 郷里である長野へ疎開、風景画制作に没頭 1947年11月 砂子、切箔を取り入れた風景画で初の個展 開催(於 東京美術倶楽部)

1950年 歌舞伎座、明治座の天井・欄間等に金砂子切箔 装飾

1951年 6月 第1回五水会(小林古径、安田靫彦、前田 青邨等)に「瑞陽」等出品。(於 東横百貨店、中村 好古堂主催)第6回まで開催

1959年10月 「縣治朗近作展」開催(於 弥生画廊)

1961年 新橋演舞場、明治座の緞帳の意匠と制作

1962年 ホテルオークラ平安の間等の壁画。これより10年に亘り同ホテルの壁画を担当

1963年 東京ヒルトンホテルのロビー柱等のスチール蒔 絵⁶¹

1964年 ホテルニューオータニ芙蓉の間の壁取付扇面 大阪ロイヤルホテル(リーガロイヤルホテルの前 身)ロビーの大柱列にスチール蒔絵

1965年 メルボルン大学日本間 (Japanese Room) の襖 絵

11月 「縣治朗展」開催(於 村越画廊)

1968年 成田山新勝寺大本堂の襖等にスチール蒔絵

皇居新宮殿千草千鳥の間の襖および万葉額の料紙 1971年 外務省飯倉公館大広間、床の間の壁面に箔装 1972年 吉川栄治国民文化賞受賞。秩父宮邸飾棚の壁面 にスチール蒔絵

1974年 赤坂迎賓館游心亭の広間、床の間の万葉額料紙 ホテル花巻ロビー壁画、エレベーター正面スチール蒔絵、緞帳の意匠

11月 「縣治朗作品展」開催(於 日本橋三越本店)。第3回まで開催

1977年 アメリカ日本大使館の大飾棚にスチール蒔絵 1978年 池上本門寺客殿正面の大壁画にスチール蒔絵 1982年12月 逝去

以上のうち、茶事の記録からうかがえるのは、以下の4 点である。

- ①六祖慧能に関する資料送付以降、三溪主催の茶事に定期的に招かれていること
- ②三溪が長男善一郎追善のため催した連日の茶事に、実業家たちを措いて第一日目に他の画家たちとともに招かれていること
- ③他の画家たちとは異なり、松永等の著名な数寄者たち とも席を同じくしていること
- ④三溪による(結果として)最後の茶事となった席にも 招かれていること

①は、高山寺への作品寄進に対する三溪と縣のかかわりの深さを示唆し、③は縣が田中と共に、数寄者たちが関与した古美術の模写に従事したことの影響を見て取れる。②と④からは、縣が三溪にとって心を許せる人物であったことがうかがえる。また三溪逝去後は、国家施設やホテル、宗教施設等の巨大建築の仕事をすすめた人物であることが分かる。

なお略年譜には挙げなかったが、縣と禅との関わりについては、画業の上で大智勝観(本名は恒一、日展参事等。坐禅をよくしたと縣は評している)から学んだこと、また駒澤大学で鷲尾順敬(東京帝国大学文学部史料編纂官、後述)の仏教文化史講義を永らく聴講し、鷲尾宅で自作の評を受ける間柄であったこと等を指摘できる⁶²。この書簡に記される「大乗禅」とは、当時月刊誌として刊行されていた『大乗禅』(中央仏教社)を指すが、鷲尾の連載等が載るこの雑誌に縣は興味を示したと推測される。

『大乗禅』の創刊は1924(大正13)年10月で、「国家社会及び人生を善化向上」を図り、社会や人生を「大乗禅の太陽に照らされつつ太陽化」することを目的とする⁶³。初期の主な執筆陣には、禅宗各派の管長等(揮毫や提唱)のほか、原田祖岳(駒澤大学教授等)、飯田欓隠(後述)、鈴木大拙等が挙げられる。また、岡本一平による『碧巌録』の漫画釈や小川千甕、小川芋銭等による挿絵、鷲尾順敬等による口絵解説、さらに文芸欄には坪内逍遥、武者小路実篤、芥川龍之介、佐々木信綱等による作品も掲載されていた。在家読者による投稿も活発で、鈴木大拙の寄稿への批判や、原田祖岳とのQ&A、原田と当時の駒澤大学学長の忽滑谷快天との間に起きた「正信論争」について、厳しい忽滑谷批判が次々と寄せられてもいる。また、当時の総理大臣である若槻礼次郎による「私の参禅とその動機」等もみえる⁶⁴。

書簡で言及される、縣が三溪に送った号は、『大乗禅』 7-2、67号(昭和5年2月)であろう⁶⁵。この号の記事には

- 村上素道「日本禅の功勲者明恵上人」
- ・林川義宗「王龍溪と六祖慧能」

等が見えるが、創刊号以降昭和6年10月までの号で六祖がまとまった形で採りあげられたものは、他は戯曲が3回 66 と、「六祖挟担図」($\mathbf{2}-\mathbf{3}$ 、② $\mathbf{表2}$ f))が2回口絵になったのみである 67 。

三溪は村上による明恵に関する記事にはコメントしていないが、村上とその寄稿の内容にも触れておく。村上は京都の永興寺(曹洞宗)の寺主であるが、道元と明恵とに「頭脳を支配⁶⁸」された人物であり、当時の高山寺住職、土宜覚了の師で同じく高山寺住職でもあった土宜法龍とも親交をもち、高山寺への参拝、遺墨の拝観などをしばしば行っていた。明恵上人七百年遠忌にむけて、『栂尾山高山寺明恵上人』を2年前の1929(昭和4)年に刊行してもいる。

村上の寄稿は、『明恵上人伝記』に記される、明恵と 栄西との邂逅と印可等のエピソードにより、日本におけ る禅の創業に大いに功のあった人物が明恵であり、『達 磨講式』が明恵の著作である可能性を示唆する内容であ る。『大乗禅』の他号においても、明恵は禅僧と同様視 され並べて紹介されており⁶⁹、三溪が高山寺に禅宗の祖 ともされる慧能の肖像を描き寄進したのは、当時の明恵 への理解からみればスタンダードなものであった。

次に、林川⁷⁰の寄稿は、王陽明門下である王龍溪が同門の銭緒山と師の前で試みた問答を、弘忍門下の慧能と神秀の偈と比較したもの⁷¹で、慧能の経歴が比較的詳しく示されてもいる。林川は「本来無一物」の偈を次のように解釈したのち、慧能と王龍溪は800年の歳月と禅学と儒学の違いを超えて、その見解が相似することを指摘している。

菩提本無 $_{
ho}^{2}$ 樹 。明鏡亦非 $_{
ho}$ 台 $_{
ho}$ 。本来無一物 。何 2 処 $^{-5}$ 惹 $_{
ho}^{2}$ * 塵埃 $_{
ho}^{2}$ 。

吾々が太極より眺むる時は、菩提の菩提として認むべきものなく、煩悩の煩悩として認むべきものがない。本来無一物なるが故に、修證不二(引用者註:修行と悟りは一つのものという考え方)である。迷悟一如である。あらゆる相対的の観念を泯絶して、一乗円頓(引用者註:ただひとつの真実の教えによってすみやかに悟ること)の境に住するのである。

(中略)

(慧能と王龍溪の:引用者補足) 二人は概念的知識に頼

図3-2 原三溪「六祖大師」(個人蔵、部分)

図3-1 原三溪「六祖大師」(個人蔵) 図3-3 原三溪「六祖大師」(個人蔵、部分)

らすに、哲学的直観を以て見性悟道(引用者註:自己の本性である仏性を悟ること)し、その言行は常に高所大所よりしてゐるのである。六祖が本来無一物と喝破し、王龍溪が無善無悪と論じたのは、何れも唯一なる本体の側に立って、物を眺めたからである。

然らばその哲学的直観とは如何なるものか、私はこの 問に答ふる前に、物の見方に二つの方法がある事を述べ ねばならぬ。

吾々が物を見るには二つの方法がある。一は外部的見方である。即ち何か一つの立脚地を定めてそこから見るのである、故に立脚地に種々の相違のある如く、その見方には様々の差異を生ずるのである。例へば一輪の花を見るにしても、或る学者は花弁や雄蘂雌蘂などの形態的方面から見るし、或る学者は赤とか青とかの色素の方面から見るといふ具合で、分析的に研究して細かい説明を下すのである。もう一つの見方はその反対で、物の内部から見るのである、物自身に自分がなつて見るのである。分析的な説明に拠らずに統一的に物を見るのである。5をまずに物の本質を摑まんとするのであつて、此の境は言詮を絶した境である、かかる境地を知らんとするには、どうしても直観によるより外はない。所謂水を飲んで冷暖自知するのである。

由来哲学的直観は見性悟道に於ける唯一の方法である。生きて活動しつつある道の本質を把握せんとする場合、単なる抽象的概念的知識によっては、どうしても目的を達することはできない。

(中略)

花に対する科学者の説明が、いくら千言万語を費して 精緻を極めたものであつても、吾々は生きた花の本質に は、その説明だけではいかにしても触れることはできぬ。 それは物の外部的な見方であり、概念の寄せ集めたもの にすぎないからである。

幼時より漢籍になじんだ三溪には、陽明学とならべて慧能の偈を解釈する林川の論は理解が容易ではなかったかと推測される⁷²。また、書簡に「六祖大師の歴史」とあるのは、単なる慧能の伝記を指すのではなく、林川の指摘にあるように慧能の境地は後の王龍溪にも見られるという東洋における哲学的直観の系譜が連綿と続く歴史的視点を指すと考えられる。(後述のように三溪は既に六祖慧能を描いた作品を何点か評価しており、その略歴は把握していたはずである)

もうひとつ三溪が言及した「賊後弓」とは、飯田欓隠 の漫録「不入涅槃一遼東の豕(五九)一」を指す。(本 人若し欓に向つて、清浄行者何としてか不」入『涅槃』と問はば、欓は言はん、是れ汝が清浄を認むるがためなりと。認堂で清浄上帝(=唯:引用者註)に涅槃に入らざるのみならず、入生地獄『如於箭 と。

(中略)

只即今是 $^{\text{L}}$ 如何 $^{\text{L}}$ とみよ、清浄ありや、涅槃ありや、乃至破戒堕獄究 $^{\text{L}}$ 来 $^{\text{L}}$ 究 $^{\text{L}}$ 去らば、自性の認むべきなし、畢竟空なり、即今の上何者かあらん、即今といふも既に遅八刻ぢや。真の清浄は清浄の認むべきなき点にあり、只腰をすへぬように工夫していかねばならぬ。止むなくんば只この清浄行者乃至不 $_{\text{L}}$ 堕 $^{\text{L}}$ 地獄 $^{\text{L}}$ の一声あるのみ、これ這箇(引用者註:しゃこ、そのものの意)なりや、これもまたよくよく参究して見よ、自性の認むべきはない。(中略)

自己を忘れてこの声(引用者註:只是這箇)に参ぜよ、 坐禅してをる当体とこの声と同か異か、隻手の音声(引 用者註: 片手で手を打つときの音を聞けという公案)と、 不_レ入^ラ涅槃^ニの音声と、これ同か異か、二祖の求^{ムルニ}心 ^ヲ不可得といひ、三祖が求^{ムハニ}罪^ヲ不可得^{ナリ}といひし(引 用者註:禅の二祖である慧可が安心を得たいと師に乞う と、心を持ってくるよう言われ、心を求めたが得ること が出来ないと気づいたこと、病のため滅罪を師に乞うた 三祖の僧塚が罪を持ってくるよう言われ、罪を求めたが 得ることが出来ないと気づいたことを指す)と、この声 と同か異か、多くは眉下に眼あることを知つて、眼上に 眉あるをしらぬものばかりだ、見よ清声に自性なきが故 に、浄来る、浄また自性なき故に、行^{イデ}到^ル者[^]到^ル、乃 至地獄、乃至一切万象、皆この一声より胚胎せざるはな し。大なる哉声や、念々刹那々々に生滅変遷して払跡滅 跡以て宇宙の大現象を起こして、微塵ばかりも固定性あ ることなし。即ず是レ万物の当相なり、現状なり、この外 何者かあらん、我身も亦この声の如く、然り知るべし、 六祖の本来無一物、何処=カ惹ニン塵埃ッとのたまひしを、 もうこれまで来ればしめたものだ、

(中略)

閑蟻争^力拽²蜻²蜒翼³(無固)

蜻**蜓**の羽**拽**く蟻の暑哉、不入涅槃の手もでざりけり。 新燕並^ビ憩^フ楊柳^ノ枝(無心)

燕憩ふ柳の枝や長閑なり、清浄行者なんとみるらん (ママ) 蚕婦携♪デ籃³多²菜色 (無意)

蚕飼ふ桑摘姿美しきかな、破戒の比丘も唯笑ふべし。 村童偸ご^デ筍³過²疎籬² (無我)

筍を盗んで急ぐ子供哉、堕る地獄はどこにあるぞよ。

飯田による解釈の特徴は、声による見性という点からのアプローチ、『論語』の「四絶⁷³」を () 内にあてはめ、更に白隠の頌を5・7・5調に翻案し、不入涅槃の義を7・7調で平易に説いたものを接続させ一気に全体への理解をすすめるところであろう。特に第三句の「蚕飼ふ桑摘姿美しきかな」は、生糸業に身を捧げた三溪にとっては、頌を身近に感じられるものではなかったか。

なお飯田は、2代目飯田柔平(適塾初代塾頭の婿養子) の養子であり、東京大学医学部74を卒業後、2度に亘っ てコレラの流行による凄惨な現場に立ち会い(飯田の友 人も他界した)、禅へと向かった人物である。著名な禅 家である中原鄧州(南天棒)より印可を受けたがあきた らず昼は医者として、夜間は禅者として修行をすすめ、 60歳で原田祖岳の下で出家後、二條厚基(公爵、貴族院 公爵議員等)の創立した貴族院議員中心の「慧照会」、 前述の若槻礼次郎をはじめとする政財界の重鎮たちが参 じた「興禅護国会」を指導した⁷⁵。高名な人物を養祖父 とし、猖獗極まる現場に向き合い、仏教への深い理解を 伴いながら在家として医業に励んだ飯田の生き方そのも のも、原善三郎を養祖父とし、生糸の暴落や関東大震災 からの復興に立ち向かいながら当時一流の禅者と交流を 持ちつつ仏教美術を愛好し蒐集した三溪の共感を深くし たとも思われる。

三溪は他の記事も興味を持って読んだことが書簡より 知られるが、この号には

- ・梶川乾堂(豪徳寺主董)「禅門の行持(八)」 「元来叢林は公界の道場であるから大勢の持合ひ世帯、 丁度合名会社のやうなもの」
- ・菅原時保(建長寺派管長)「毒語心経提唱(一三)」 「釈迦も達磨も同じ商店を開業し、人天の顧客を相手 に、半満、円頓、大小、権実等⁷⁶種々様々の物品を店 先に陳列したために、相応に買手があった。ところ がいつも売れ残りの品は依然として今に買人がない。

抑々何だ色即是空、空即是色、これなり。これを二千 年の滞貨則ち店晒しの古道具といふ。」

「凡そ物品は上等で売れぬものと下等で売れぬものと がある。これは上等で買手がないのか、下等で買手が ないのか、(中略)無論これは上等も最上等無類飛切 である。故にその値も随って高い。」

「恁麼(引用者註:いんも、「こ/あのような」の意) の古道具は玄沙(引用者註:唐末五代の禅僧、玄沙師 備)あたりの腕前がなくては到底価格を下すことも出 来まい。」

といった、合名会社を営み、古美術蒐集に多額の費用を 投じた三溪にとって、身近に感じられる比喩を伴った寄 稿が散見されることを指摘しておく。

2-3. 六祖像の造形

三溪が画題とした六祖慧能の像は宋代以降多く描かれたが、それは唐末五代の乱後の仏教界再編成の動きによって、禅家が自らの系譜を主張したためとされる⁷⁷。高山寺にも「達磨宗六祖像」一幅(紙本墨書、鎌倉時代)が蔵され、慧能は五祖弘忍の前に頭巾をかぶり立膝で合掌する姿と、僧形で胡牀に座し、南岳懐譲に対する姿で描かれる。

三溪は『三溪帖』解説のために執筆した文章を残している⁷⁸が、そこには梁楷筆「六祖」の双幅(下記⑦⑧)を「入神ノ筆」として評価し、狩野元信筆「祖師図」6幅(うち1幅が下記⑤にあたる)を「傑作名品」としている。古美術の大コレクターであり、他のコレクターの所蔵品も把握していた⁷⁹三溪は、様々な六祖像⁸⁰についても見識を持ったうえで制作にあたったと考えられる。

東洋画の画題の意味や出典を網羅した金井1997や斎藤隆三1977には「六祖説法」(幡が動くのは風や幡ではなく汝の心が動くのみと六祖が説く姿⁸¹)「六祖伝衣」(五祖より伝法の証として袈裟を受ける姿)「六祖負金」(六祖の命を奪おうとした行昌への教示)「六祖調心」(下記④)「六祖渡江」(下記⑤)といった六祖を画題とした作品に関する解説がある。それをふまえ、当時三溪が知り得たであろう、日本に伝わり、あるいは日本で描かれた六祖像を次のように大まかに分類した。なお、本来は法量や筆致等も考慮すべきだが、三溪が「写」したことを鑑み、慧能のポーズや持物を分類基準とした。また筆者や制作年等の比定に関しては三溪が画題として関心を持ったかを問題とするため、伝承であっても当時のものを記載することとし、現所蔵者が不明なものには出典を

表1 頂相形式

	作品名	筆者/賛者	全身/半身	頭巾 の有 無	慧能の向き(正面/ 画面に向 かい右/画 面に向か い左)	制作年代	材質/技法	所蔵先	備考
a)	大鑑禅師像	張九成賛	半	有	正面	南宋	絹本著色	福岡 聖福寺	
	大鑑禅師像	張九成賛	半	有	正面	南宋	絹本著色	京都 真珠庵	
b)	六祖慧能		半	有	右	原碑:元時代	紙本墨拓	大分 円福寺	「禅宗六祖像」のうち
	六祖大鑑禅師	明兆筆	半	有	右	室町	紙本著色	京都 東福寺	「四十祖像」のうち
	六祖慧能大師	明兆筆/周噩賛	半	有	右	室町	絹本著色	京都 鹿王院	「釈迦三尊及三十祖像」のうち
	六祖大鑑禅師	雲谷等顔筆	半	有	右	桃山	紙本著色	京都 金地院	「三十祖像」のうち
c)	六祖	逸然性融筆/隠元隆琦賛	半	有	左	1668(寛文8)	絹本著色	京都 萬福寺	「列祖像」のうち
d)	六祖慧能大師	仙厓義梵筆·賛	全	有	正面	1832(天保3)	紙本墨画	福岡 幻住庵	「六祖像」のうち
e)	六祖慧能禅師	西礀子曇賛	全	無	右	鎌倉	絹本著色	京都 妙心寺	「六代祖師像」のうち。曲彔に座す
	六祖大鍳禅師	乾峯士曇賛	全	無	右	鎌倉	絹本著色	福岡 承天寺	「禅家六祖像」のうち。曲彔に座す

表2 薪売りとしての姿(全身像)

	作品名	筆者/賛者	頭巾 の有 無	担い棒 の位 (右 肩)	慧能の向 き(画面に 向かい右/ 左/正面)	制作年代	材質/技法	所蔵先	備考	出典
a)	六祖挟担図	直翁筆/偃谿広聞賛	有	左	右	南宋	紙本墨画	東京 五島美術館		
	六祖荷薪図	敬書記筆/狩野探幽写	有	左	右				「道釈人物図鑑」のうち。担い棒の両端に 薪を結う	
	六祖図	伝如水宗淵筆	有	左	右	室町	紙本墨画	東京芸術大学大 学美術館	担い棒の両端に薪を結う。五祖との双幅	
b)	六祖図	牧谿筆/狩野派写	有	左	正面			東京国立博物館	担い棒の両端に薪を 結う。右手に念珠を 持つ	『牧谿 憧憬の水墨画』五島 美術館 1996(平成8)年 p.131
c)	六祖荷薪図	伝牧谿筆/狩野探幽 写	有	右	右				「道釈人物図鑑」のうち	
d)	六祖の図	伝牧谿筆/西巌了恵 賛	/	右	左	鎌倉			鉢巻状の布で頭部を 覆う	田山方南「新たに出た六祖 の図」『古美術』23号 1968 (昭和43)年9月
e)	六祖担薪	海北友松筆/鉄山宗 純賛	無	左	右	江戸	紙本墨画	静岡県立美術館	「禅宗祖師図」六曲 一双	
	六祖挟担図	啓孫筆	無	右	左	室町	絵本墨画		鍬の柄に柴を結う	『国華』436(37-3)1889(明 治22)年3月
f)	六祖	久隅守景筆	無	右	左	江戸			牛に乗る人物・五祖 との三幅対	『某家所蔵品辰巳氏遺愛 品入札目録』金沢美術倶 楽部 昭和8年12月12日
g)	六祖担柴図	松花堂昭乗筆/江月 賛	無	右	後ろ姿	江戸			担い棒の両端に柴を 結う	『志きし満』1-3 日精社支 部 1911(明治44)年3月
h)	六祖	久隅守景筆	無	/	右	江戸			薪を左肩に背負う。 蓮鶺鴒・蘆翡翠との 三幅対	『上京神田氏所蔵品入札』 京都美術倶楽部 大正6年 12月3日、『松風聴松庵氏 遺愛品入札目録』京都美 術倶楽部 昭和4年1月21日

明記し、三溪作と同じ構図をとった③に関しては管見に 及んだものはすべて挙げた。

①頂相形式82:表1

②薪売りとしての姿(全身像)(「盧能売薪83」):表2

③碓房にて米を搗く姿(全身像)(「六祖踏臼84」):表3

④鍬あるいは杵が描かれる(臼杵をとるものは「六祖調 心」と称される⁸⁵):表4

⑤五祖が六祖を舟で送る姿(「六祖渡江86」)

- ・「五祖送六祖渡江」(「祖師図」6幅のうち)狩野元信筆 紙本墨画淡彩 室町時代 東京国立博物館蔵 (同様の作に背景の山容を略した「元信六祖清巌賛」 一幅や「六祖船子図」(顔輝筆、玉川写。船子図との 双幅。東京国立博物館蔵)あり
- ・「禅機図屏風」六曲一双のうち 長谷川等伯筆 紙本 墨画 桃山時代⁸⁷
- ・「六祖渡江図」(「人物・花鳥図押絵貼屏風」六曲一双 のうち)海北友松筆 玉室宗珀賛 紙本墨画 江戸時 代⁸⁸

表3 碓房にて米を搗く姿(全身像)

	作品名	筆者/賛者	頭巾 の有 無	杵踏足右/ 左(左)	靴の 有無	腰着るの無	慧能の向 き(画面に 向かい右/ 左)		材質/技法	所蔵先	備考	出典
a)	六祖碓房図	狩野山雪筆	有	右	無	無	左	江戸	紙本墨画	京都 鹿王院		
b)	六祖踏碓図	狩野常信筆/ 賛有	有	右	無	有	左	江戸	紙本墨画	神奈川 東慶寺		https://tokeiji.com/a bout/cultural/shoga/ rokuso
c)	六祖大師図	与謝蕪村筆	有	右	無	無	右	明和年 間か	絹本着色			恩賜京都博物館『蕪 村遺芳』小林写真製 版所出版部 昭和7年
d)	六祖図	遂翁元盧筆	無	左	無	無	左	江戸	紙本墨画	愛知 丈山文庫		
	六祖春図	仙厓義梵筆・ 賛	無	左	無	無	左	江戸	紙本墨画			https://terebess.hu/ zen/sengai.html
	六祖碓房図	寂室堅光筆・ 賛	無	左	無	無	左	江戸	紙本墨画	駒澤大学禅文 化歴史博物館	左足で碓を 踏もうとする	
e)	大鑑禅師	下村観山筆	無	左	有	無	左	1917(大 正6)	絹本墨画		図4	『観山新作集』精華社 1918(大正7)年
f)	慧能大師	仙厓義梵筆· 賛	無	左	無	有	左	江戸				『大日』11号 大日社 1935(昭和10)年10月
	六祖	長澤蘆雪筆	無	左	無	有	左	江戸			扇子に描か れる	『兵庫余暇庵神戸渡 邊氏並二某家所蔵品 入札』昭和3年10月2日
g)	六祖慧能踏 臼画替	仙厓義梵筆· 替	無	左	無	無	右	江戸	紙本墨画	東京 出光美術館		
h)	六祖大師踏 碓図	一絲和尚(仏 頂国師)筆・ 替	無	左	無	無	右	江戸		Д	右肩を脱ぐ。 碓に手すりな し	倉光大愚編『一絲和 尚遺墨集』工藝社 1926(大正15)年
i)	六祖慧能米 搗き図	大観文殊筆· 賛	無	右	無	無	左	江戸			確につけた 紐を右手に 持つ、顔は伏 せる	『禅文化』216号 2010(平成22)年4月 禅文化研究所
j)	碓房六祖図	仏乗(天岸慧 広)筆・賛	無	右	無	無	右	鎌倉				『塔影』11-9 塔影社 1935(昭和10)年9月
k)	六祖慧能踏 臼画賛	仙厓義梵筆• 賛	不明	足を そろ える	無	無	後ろ姿	江戸	紙本墨画	東京 出光美術 館		
1)	Sixth Zen(Chan) patriarch Huineng(J.E' no) seated on arm of rice-mill	曽我蛇足筆	有	/	草鞋 履き	無	左	18世紀	紙本墨画	大英博物館	碓に腰掛ける。右手に唐 団扇を持つ (米は搗かない)	館のサイトにて閲覧
m)	六祖図(留守 模様)	遂翁元盧筆• 賛	/	/	/	/	/	江戸	紙本墨画	愛知 丈山文庫	以下、碓のみ が描かれる 同様の作が	
	六祖図	東嶺円慈筆・ 賛	/	/	/	/	/	江戸	紙本墨画	早稲田大学	禅文化研究 所にも蔵される。 http://www.z enbunka.or.jp /data/web/e ntry/post_8.h tml	https://www.wasedaj p/inst/weekly/featur e/2016/10/17/16862 /
	六祖自画賛	宗且筆·賛	/	/	/	/	/	江戸			•••	『県下大高町下村氏 及某家所蔵品売立』 名古屋美術倶楽部 大正14年12月14日
	作品名不明	円山要宗(伝 衣)筆·賛	/	/	/	/	/	近代			「碓の絵に盧 公既去碓音 有響と併題」	横井夜雨「箒庵翁追 善」(『日本之茶道』5- 12 昭和14年12月所 収)

- 「五祖弘忍送慧能画賛」仙厓義梵筆・賛 絹本墨画 江戸時代 東京 出光美術館蔵
- ·(作品名不明) 仙厓義梵筆·賛 江戸時代89

⑥衣鉢が描かれる(全身像)

- a) 帽子を持ち、衣鉢を見下ろす
- /田中訥言写 紙本墨画 文化年間 京都 三秀院蔵90

(冷泉為恭による模写あり)

- b) 頭巾あり、岩に腰掛け、慧明と衣鉢を見下ろす
- ・「盧行者・明上座図」(鉢を持ち上げようとする慧明と の双幅)長澤蘆雪筆 紙本墨画 江戸時代 和歌山 草堂寺蔵91
- ・「六祖大師」(台上の円鏡・箒との三幅対)土佐光起筆 ⑦竹を切ろうとする全身像(慧能の伝記にこの事跡は知 られない)

表4 鍬あるいは杵が描かれる姿

	作品名	筆者/賛者	全身 /半 身	頭巾の有無	鍬あるい は件元 負う/柄 た方 持ち方(杵 が上下)	かい右/画	制作年代	材質/技法	: 所蔵先	備考	出典
a)	六祖慧能図	無学祖元賛	全	有	左	右	鎌倉	紙本墨画 淡彩	大阪 正木美術 館	同様の「六祖慧能図」(清 拙正澄賛 絹本墨画 個人 蔵)と京都の天授庵方丈 襖絵「祖師図」(紙本墨画 伝長谷川等伯筆 桃山時 代)がある	
	六祖	狩野探幽筆	全	有	左	右	江戸	絹本		釈迦・五祖との三幅対	『当市市田氏盆栽刀剣類 西陣某大家所蔵品入札』 京都美術倶楽部 大正2 年6月9日
	六祖図	狩野安信筆	全	有	左	右	江戸	紙本墨画		尚信筆五祖との双幅	並木覚太郎『桂林秋影』 1920(大正9)年
	六祖図	清拙正澄賛	全	有	左	右	1336(建 武3)	紙本墨画		「可翁」印あり 善財童子 (北礀居簡賛)・五祖(「可 翁」印)との三幅対として 伝来。狩野派による模本	8) 1994(平成6)年4月
b)	六祖	雪舟筆	全	有	右	左	室町				『秋元子爵家御蔵品入 札』東京美術倶楽部 昭 和6年5月4日
	六祖図	秋月等観筆	全	有	右	左	室町	紙本墨画	東京芸術大学 大学美術館	達磨・五祖との三幅対	『後素遺芳』0094(僧秋月 筆六祖慧能図)
c)	Der sechste Zen- Patriarch(Hui Neng)		全	<u>笠</u>	左	右	江戸	紙本墨画	ケルン市立東 洋美術館		館のサイトにて閲覧
d)	六祖図	狩野安信筆	全	有	上	右	江戸			「五祖六祖図」双幅	『日本美術画報』4-5 1897(明治30)年10月
e)	六祖	狩野探幽筆	全	有	下	右	江戸	絹本		五祖との双幅	『五苦楽翁遺愛品髻華荘 所蔵品入札』東京美術倶 楽部 昭和4年5月14日
f)	(不明)	雪舟筆	全	有	下	左	室町			布の袋・五祖との三幅 対。本来は双幅か。右手 人差し指をたてる	『某旧家蔵品入札』大阪 美術倶楽部 大正8年11 月3日
g)	六祖	狩野探幽筆/ 隠元隆琦賛	全	無	右	右	江戸			五祖との双幅	『中京杉浦家蔵品入札』 京都美術倶楽部 昭和4 年4月4日
h)	六祖図	狩野安信筆/ 玉舟賛	全	無	上	左	江戸				『秋元子爵家御蔵品入 札』東京美術倶楽部 昭 和6年5月4日
i)	六祖	狩野探幽筆	全	無	下	右	江戸	紙本墨画	東京芸術大学 大学美術館		140 1077.14
<u>j</u>)	六祖大師	関精拙筆·賛	全	無	下	左	大正		7 7 7 7 1 1 7 1		『大乗禅』創刊号 p.23 『群芳清玩』第四冊 藝海
k)	六祖図	雪舟筆/賛有	半	有	上	右	室町	紙本墨画			社 1913(大正2)年、『神戸勝田家所蔵目録』(大阪美術倶楽部 昭和4年2月5日)には「六祖自画賛」として掲載
	六祖慧能図	狩野探幽筆/ 即非如一賛	半	有	上	右	1665(寛 文5)	紙本墨画	埼玉 平林寺		『武蔵野の禅刹 平林寺 ―伝来の書画名宝展―』 花園大学歴史博物館 2015(平成27)年
I)	六祖	雪舟筆	#	有	上	左	室町	紙本墨画	東京芸術大学 大学美術館	狩野養信等による模本あ り	
m)	慧能図	長谷川洞雲 筆/鷺船賛	全	無	/	正面	江戸	紙本墨画	ボストン美術館	「慧能・蜆子・猪頭図」三幅 対。臼の中に杵を入れる	館のサイトにて閲覧
n)	六祖	雲谷等益筆	全	無	/	右	江戸			釈迦・五祖との三幅対。 臼の前で杵を持つ	『書画入札目録』東京美術 倶楽部 大正7年5月10日
0)	六祖図	渡辺始興筆/ 賛有	全	無	/	左	江戸	紙本墨画		杵を脇息にして立膝で書 を読む	『琳派』第五巻「綜合」図 書出版紫紅社 1992(平 成4)年
p)	六祖大師図	英一蝶	全	有	/	左	江戸			立帽子を被り臼の上に座 す。杵は下に置かれる	『一蝶リターンズ 元禄風 流子英一蝶の画業』板橋 区立美術館 2009(平成 21)年

- ·「六祖截竹図」梁楷筆 紙本墨画 南宋時代 東京国 立博物館蔵
 - (⑧模写との双幅(狩野探幽・小堀遠州の手紙添「梁 楷 祖師」) あり)
- ・「六祖」(⑧の姿との双幅(「五祖六祖」)) 啓書記筆 室町時代⁹²
- ・"The Sixth Patriarch of Zen at the Moment of Enlightenment" 狩野探幽筆 / 沢庵宗彭賛 紙本墨画 江戸時代 メトロポ リタン美術館蔵⁹³
- **⑧経典を破る全身像**(慧能の伝記にこの事跡は知られない)
- ·「六祖破経図」伝梁楷筆 紙本墨画 南宋時代 東京 三井 記念美術館蔵

(⑦の模写との双幅(狩野探幽・小堀遠州の手紙添「梁楷祖師」) あり)

・「六祖」(⑦の姿との双幅(「五祖六祖」)) 啓書記筆 室 町時代⁹⁴

(下村観山によるヴァリアントあり95)

- ⑨舟から川に落とされ合掌して許しを請う姿(慧能の伝記にこの事跡は知られない、夾山善会との混同か)
- ·「六祖禅師受難禅機図」河鍋暁斎筆 絹本墨画淡彩 江戸 時代 Poul Klejnstrup-Jensen Collection⁹⁶
- ⑩笠を背中に牛に乗る全身像(禅宗画等一般に見られる)
- ・「六祖」(鶫・叭哥鳥との三幅対) 勝田竹翁筆 江戸時 代⁹⁷
- ①頭巾をかぶり叉手で画面左向きに立つ全身像(拙宗等 揚筆「高士観梅図」と同様の姿。混同があるか。ただ し慧能が黄梅に参じたことから黄梅を賛で詠む例があ り、その影響かとも考えられる)
- ·「六祖」狩野探幽筆/江月·松花堂賛 江戸時代98
- ⑩頭巾なし、右手に杖を持ち左手で僧衣の裾を持ち川を 渡る全身像(洞山良价との混同か)
- ・「六祖」(枯木叭々鳥・蓮鷺との三幅対) 木村探元筆 江戸時代⁹⁹
- ③頭巾なし、箒を持つ全身像(香厳智閑との混同か)
- ·「六祖」橋本雅邦筆 明治時代¹⁰⁰
- (4)頭巾なし、左手に杖を持ち松樹の下に立つ全身像

·「六祖慧能大鑑禅師」橋本雅邦筆 明治時代¹⁰¹

以上のような、多彩な造形のなかで三溪が選んだのは③ である。その理由としては

- ・「本来無一物」の偈にふさわしい姿
- ・在家者が坐禅ではなく日常の仕事(米搗き)を務める なかで、悟りを得ることを示す姿

といった点が挙げられよう。後者については、三溪が釈宗演に人生観を語ったところ、「あなたはもう禅などやる必要はない。それでいいのだ。それが禅なのだ。」と折紙をつけられたというエピソードが伝わる¹⁰²ように、三溪は坐禅によらずとも日常業務に従事しながら精神的に高い境地を得ることが出来ると考えていた可能性と関連する。もしそうならば三溪は自身の仏教観を六祖像に投影していることになる。この点についてはさらに検討を加えることとする。

なお書簡(図1-2)にみえる、三溪が「写」した元の 作品については現在のところ不明である。注22で指摘し たように三溪による「鳥獣戯画」の模写は、原本にとら われない闊達なものであったため、この六祖像も同様に 原画にさほど依拠しない可能性があるが、管見の限りで は三溪作の六祖像に最も類似するのは、下村観山の「大 鑑禅師」(図4)である。この作は、三溪が扉字を揮毫し た遺作集(昭和6年9月刊行)乾(=上巻)の末尾におかれ、 時期的に三溪が六祖像を描くうえで参考にしやすかった 作である¹⁰³。観山は、三溪同様に古美術の名品を所蔵し たことが知られ104、その筆による六祖像はこの作の他に チェコスロバキアに出展した破経図(上記®)があり、 図4の「大鑑禅師」も、何らかの原画(を左右反転して 描いたこと)を想定できる。三溪が縣に宛てた書簡のう ち、図1-2において三溪が縣に礼を述べたのは、観山が 制作の源泉とした作品に関する資料を縣が三溪に示した ことを示唆すると思われ、三溪が縣の美術観や教養に深 い信頼を置いていたことがうかがわれる105。

観山の作が三溪の六祖像制作に影響を与えているのであれば、三溪は縣と観山より制作上のヒントを得ていることになる。通常、三溪と芸術家たちの関係は、三溪による物質的支援のほか、所蔵する古美術品を彼らに示してともに議論したことが指摘されている。つまり、芸術上の情報の発信元は三溪であることが示されているが、この六祖像に関しては、三溪は芸術家たちから情報を得て制作を進めたことが分かる。このような制作スタイルは恐らく六祖像だけではないだろう106。

2-4. 六祖像制作が三溪に与えた影響

前稿では堂本印象が、昭和5年に集中して明恵を画題としたことを指摘したが、三溪も六祖像をこの時期に集中して描いている。六祖像を寄進した翌7年の2月、三溪は縣に「六祖大師」を贈っている(図3-1)が、この六祖像は遺香庵に寄進した作とほぼ同様のものである。同年制作の書画を収めた『三溪画集』第四には他に「米搗き」(寄進作と関連する主題)が掲載されるほか、「木食翁」、「臨済」(間宮英宗に贈った作)と、仏教者を描いてもいる。ところが『三溪画集』第五(1933~1936(昭和8~11)年制作の書画を収める)にはこのような動きは認められなくなり、その後仏教を主題とする画は『三溪画集』第六に掲載された、1937(昭和12)年に森川に贈った「出山釈迦」(図7-1、後述)まで空白期が続く。

では六祖像を制作したことは、あくまでも一時的なイベントだったのだろうか。それを考えるうえで注目されるのは、1934(昭和9)年に長次郎作の赤楽茶碗(銘「無一物」、穎川美術館蔵)を3万円という高額で購入していることである。関東大震災後の三溪は、横浜の復興に全力を尽くすためなどから、芸術家たちへの金銭的支援を断念、美術品購入も控えがちだったことが指摘されているが、「無一物」は当時の他の購入品に較べ、破格の費用を投じたもので、三溪の購入意欲の強さが見て取れる¹⁰⁷。その理由として、茶碗自身の魅力にあわせ、遺香庵に寄進した六祖像の「本来無一物」の影響を挙げられるのではないだろうか。この茶碗で三溪より茶を点てられた松永は以下のように述べる¹⁰⁸。

さて無一物茶碗の拝見。無一物は即ち無一物で些の衒気、景色、扮装をも有せず、空虚にして秋色山野を鎖ざし、暮色さらに到らんとする如き静寂の感有るものにて、之を彼の小田原(=益田鈍翁:引用者註)蔵の一文字茶碗に比すれば其外側及高台に釉流れ無く、所謂景色は劣るが如きも淡々たる中に古雅いふ可らざる時代色を帯べる、但し長次郎傑作中の傑作ならんか。

碗から受ける印象と銘とがこれほど一体となっている茶碗は、ほかにないのではなかろうか」と評する¹⁰⁹。恐らく三溪も彼らと同様に「本来無一物」の具現としてこの茶碗を手元に置きたいと願ったのだろう。なお**2**-1の

また、現代においても林屋晴三(陶磁史研究者)は、「茶

略歴(注31)に挙げたように「無一物」を入手した年には、 高山寺印を有する「釈迦」(図8)を購入したと考えられる。

図4 下村観山「大鑑禅師(六祖)」

この作品は1926(大正15/昭和元)年2月の加納鉄哉(本名は光太郎。彫刻家、画家、古美術研究家。高山寺関係の資料を調査、蒐集した)旧蔵品売立にもみられる品である。三溪は加納鉄哉の旧蔵品を多く愛用したことで知られ¹¹⁰、またこの年には『雲州蔵帳』所載品等を入手していることから、興味があれば三溪はこの時点で「釈迦」を購入できたはずである。明恵上人七百年遠忌事業へのかかわりを経て、「無一物」を入手した数ヶ月後に「釈迦」を入手し、さらに同年の茶事に高山寺伝来の花器を使ったことは、遺香庵への六祖像寄進がその後も三溪に影響を及ぼし続けているといえるだろう。

3。三溪による明恵上人像

2-1の略歴で示したように、三溪は明恵上人七百年遠忌に際し、遺香庵に寄進する六祖像だけではなく、明恵その人を二幅描いている。『三溪画集』には多くの人物像が掲載されるが、日本人僧侶の肖像画として三溪が描いたのは、明恵のみとみなすことができる¹¹¹。三溪が影響を受け、慕った日本人僧侶として、空海(その書を所蔵し当初は大師流の書をなした)や夢窓疎石(その作庭への興味、示寂した臨川寺隣に隣花庵を営んだ)が挙げられる¹¹²が、彼らの肖像を描いたことは画集等からは知られない。従って明恵の肖像を描くことは稀なケースといえようが、その背景に三溪が後鳥羽院に仕えた土岐光行の子孫であることへの誇りを父から受け継いでいることをまず指摘したい。

濃州に父君の病を省みたてまつりたるとき 名を惜め汝は国つかさ土岐の家の

> 遠つ孫ぞと父はのたまふ 原三溪『古人**迂**第一集』

この短歌のみならず、2-1の略歴で示したように、後鳥羽院の御影等を入手しその後皇室に献上する等、三溪は後鳥羽院への敬意を深く持っていた。前稿で指摘したように、当時は後鳥羽院との関係から明恵は勤王僧と位置付けられてもいたため、三溪は明恵を後鳥羽院と結びつけて意識し、昭和6年(明恵上人七百年遠忌の年)に後鳥羽院の跡を尋ねて隠岐に向かい、その後明恵の肖像画を制作したのではないだろうか。

この画に関して2-3での指摘と重なる点がある事を 以下に示したいが、その前に明恵の肖像画全般について まとめておく。鎌倉時代の肖像画を分析した森暢によれ ば、明恵像は「他の高僧像に較べて二、三異なる点が見 える。即ち画像の形式に多様なものがあり、ひいてはその性格に特殊な点が見られ、また画風にも異なる点の見えることなどである」と特徴づけられている¹¹³。以下にその分類を挙げる。(若干の補足・変更を加えた)

- ①樹上坐禅像(画面全体に描かれた松樹の中で坐禅。前稿図4)
- ·紙本淡彩 京都 高山寺蔵 鎌倉時代
- · 絹本著彩 同上
- · 紙本淡彩 高知 金剛頂寺蔵
- · 板絵淡彩 京都 高山寺蔵
- ②石上坐禅像(①同様松樹を背景とし定心石上に坐禅)
- · 岩崎信盈摸本 紙本淡彩 京都 高山寺蔵 江戸時代
- ・冷泉為恭摸本 同上 益田家旧蔵 江戸時代
- ③持念珠像(両手を胸の前に掲げ念誦を繰る。右耳を見せる)
- · 絹本淡彩 京都 高山寺蔵 鎌倉時代
- ·栗原信允摸本¹¹⁴ 京都 高山寺蔵 江戸時代

④持経像

- ·絹本淡彩 京都 高山寺蔵(図5-1)
- · 絹本著彩 大阪 久米田寺蔵 南北朝時代
- ⑤山中の御影(白描。頭巾をかぶり左手に経巻、右手に 杖を持ち足駄を履く。右耳を見せる)
- ・紙本墨画 京都 高山寺蔵
- ・同上 愛媛 天徳寺蔵
- ⑥披講像(畳に座し机上に広げた聖教を指し、講義する。 右耳を見せる)
- ・絹本淡彩 神奈川 小田原文化財団蔵 室町時代か¹¹⁵
- ・不明(淡彩か)前田家旧蔵¹¹⁶

森は④について、「後世の上人影は多くこの両画像(③ と④:引用者註)によって描かれている」とする。ただ、 近代における明恵上人像の絵画作品について以前まとめ た限りでは、その多くが①と②のヴァリアントとして分 類される作であった。(前稿表1)また、それ以前には たとえば狩野探幽が明恵の生涯を描き、冷泉為恭が琵琶 の音曲に聞き入る明恵を軸物にしている¹¹⁷。しかし、三 溪は④を模写した。その理由に関しては、以下の点が挙 げられよう。

図5-1 「明恵上人像(持経像)」(高山寺蔵)

- i)村上素道『栂尾山高山寺明恵上人』の影響
- ii) 坐禅姿ではないこと
- i) について、村上の著作の口絵には、「明恵上人肖像」 として、「持経像」が掲載され、次のように説明がなさ れている。

『縁起』に曰く、「右影像は、上人多年の同法恵日房成忍親り(=まのあたり:引用者註)眼耳等の寸分を取り、筆を留め心を尽して図絵する所なり。眼精瞬かずと雖も、尊儀更に違ふこと無し云々。成忍の伝『本朝画史』『扶桑画人伝』等に見ゆ。

この著作は、当時徳富蘇峰によって紹介されたが、蘇峰の著作を全て読破し、三溪園内の臨春閣の命名を彼に依頼したほど敬意を抱いていた三溪は、恐らく村上のこの著作にも眼を通し、口絵の持経像を模写したと考えられる。2-2で紹介した書簡で、『大乗禅』の村上の記事について三溪がコメントしていないのも、既に著作で内容を把握していたためかと思われる¹¹⁸。

次にii)について、三溪は箱書に「得道」(「明恵上人」 等ではなく)としたことが示唆するところをおさえたい。

図5-2 「明恵上人像(持経像)」(高山寺蔵、部分)

得道とは悟りの境地を得ることと理解され、明恵への高 い評価がうかがわれる。得道への階梯は経典類によれば、 説法や食を衆生に与えること、光や香りを放つこと、坐 禅によって定に入ること等とされる。この「得道」の題 と描かれた明恵の姿からは、経典を理解する智慧や念珠 を繰る誦経によって明恵は悟りを得たと三溪はみなして いると解釈できる119。つまり三溪は六祖像同様、この作 でも坐禅姿の僧をあえて描かなかったことがわかる。六 祖像制作における三溪の姿勢との共通点はもう一点指摘 できる。それは、この明恵像が右耳を見せているにもか かわらず、手本とした高山寺蔵の明恵像(図5-2)のよ うに、右耳(の上端)が切れていないことである。切れ た右耳を見せる明恵像について、「明恵上人樹上坐禅像」 を中心に肖像画を分析した伊藤大輔は、「尋常ならざる 求道心から身を傷つけることも厭わなかったという明恵 の伝記を喚起し、宗祖としてのカリスマ性を強調する意 図を見ることが出来る」と指摘する120。この指摘をふま えると、三溪には明恵を祖師としてあがめる視点や過酷 な修行を成し遂げた人物とする視点は存在していないよ うである。振り返って、六祖慧能像も大きな石をつけ、 確を踏む上で重みがつくようにしたことを描いたり(2) -3、③表3のb)f)) 賛にあらわす(2-3、④表4の a) (正木美術館蔵)) ことを三溪はしていない。石のエ

ピソードは慧能が身体を痛めたことへの弘忍からの問いかけに、身体は本来空なのだから誰がそれを「痛」といおうかと答え、さらに仏性に関する問答へと展開するものだが、こういった「痛み」から「身の本空」を導き出す慧能の境地の高さ¹²¹を重視する視点は三溪にはなかったといえよう。

三溪は高橋箒庵にも同様の明恵像を贈っている122。こ の二幅を比べると、森川蔵の明恵像は、筆が割れたのか フェイスラインと右耳が二重線になっている。(図6-2) 唇も描きなおしたような跡があり、描線については高橋 蔵の方がすっきりした印象がある。また右手に持つ念珠 の玉の数も、高橋蔵の方が長く描かれバランスが良いた め、森川所蔵の作は最初に描いたものと考えられる¹²³。 では森川はこの作品をどのように受け止めたのだろう か。それを示唆する書簡が存在する124。この書簡には、 三溪より贈られた軸物の表装が出来たので森川が来訪す る旨が記される。詳細は不明だが、森川蔵の「明恵上人」 は京都の岡墨光堂で表具されており125、表具した三溪の 作を本人に見せ、そのセンスへの評を求めたのではない だろうか。この明恵像を森川が最後まで手放さず、名古 屋城にとどめ置く形で寄贈した事実を考え合わせると、 森川は三溪からの明恵像を高く評価し大切にし続けたこ とがわかる126。

4。三溪作「出山釈迦(釈尊出山)」の周辺

前述のように、昭和8年以降しばらく仏教関係の絵画をほぼ制作していなかったと思われる三溪が再び筆を執ったのが、「出山釈迦」(図7-1)である。この画は、釈迦が山林で6年間難行を試みたが、肉体を苛む方法では成道出来ないことを悟り下山したというエピソード¹²⁷をテーマとする。作例を20点ほど挙げて考察を加えた板倉聖哲によれば、このテーマは北宋以降禅宗教団を中心に多く水墨で描かれ、定型化(全身像で手を布に隠し拱手)されたものであるとする¹²⁸。また、頭光を伴う釈迦像は中国に起源があるが、特に日本で広く描かれたとも指摘する。

これら20点に加え、近代の横山大観や下村観山等による「出山釈迦」の作例を粗くではあるが調べた限りでは、三溪の作は当時所蔵していた、高山寺印のある「出山釈迦」(図8)を模写したものと考えてよい。その特徴は、「玄証本(引用者註:高野山の玄証が集めた密教図像の白描画で、その寂後に高山寺に収められた)図像類の達者な素描気運を受けついで、宋朝式の力強い筆触本位の運筆を駆使129」「渇墨の三四筆で山径を略写し、わずかに点

図6-1 原三溪「明恵上人画像」(名古屋市博物館蔵)

図6-2 原三溪「明恵上人画像」(名古屋市博物館蔵、部分)

図7-2 原三溪「出山釈迦」 (公益財団法人三溪園保勝会蔵、部分)

図7-1 原三溪「出山釈迦」 (公益財団法人三溪園保勝会蔵) 図7-3 原三溪「出山釈迦」 (公益財団法人三溪園保勝会蔵、部分)

え、本作の筆致に観音像同様「鳥獣人物戯画」との共通 性を見いだし入手したと考えられる。

板倉2016で主に採りあげられた梁楷筆の釈迦像は、苦行によって極度に痩せ衰えた姿であり、また高山寺印のある図8には頭光が描かれる。ところが三溪はこの作でも六祖像や明恵像と同様に極端な苦行の跡を描かず、また頭光を放つ崇拝すべき存在として描くこともなかった。つまりこの作品でも、三溪の仏教観が投影されていると考えてよいだろう。この点に関して、三溪は60歳の時に以下のような絵画観を述べていることを紹介したい¹³⁰。

僕の画は全く僕の発意と創意であって、何人を師とし、 何物を模倣したものぢゃない。字もさうぢゃが画は自分 の個性を発揮したものでなけりゃ駄目ぢゃ。(中略)

僕の画も画集にある通り醜美はともかく、まったく自 分の個性を全画面の上に表現したものと信じている。或 人があなたの画を見ていると貴方に接する感じがすると いったが、画集の自序に「此連(=れ:引用者註)余か 肖像なり」と書いたのでその意味で、それで僕の画に対 する望みは足りる訳である。

本稿で採りあげた三溪の作は、一見模写であるが、そこには三溪の仏教観が見て取れ、六祖慧能や明恵、釈迦に自己を投影していることがここに裏付けられる。また伏し目がちな釈迦の表情(図7-3)は板倉2016で挙げられた作例等には見受けられないもので、ある種の静けさを感じさせるが、これは苦行を不要とした釈迦の境地は静寂なものであるという三溪の認識があらわれている「32。なお、板倉2016では賛の内容も検討されているが、三溪の作に類似する賛はみあたらず、ここにも三溪の個性を読み取ることが出来る。対句表現が見事に駆使された賛(図7-2、【作品データ】参照)は、釈迦の出山をある意味天岩戸開きのように捉えており、背景等が描かれないこの作を補足しつつ、天地の広がりと自然の美を歌い上げている。

三溪のこの作品は、贈られた森川のみならず鈍翁にも高く評価されたようだ。三溪が森川に宛てた書簡¹³³では「小田原(=益田鈍翁:引用者註)より「をれにハー枚もよこさぬハ何故」とお叱りの手紙拝手仕候」と記される。三溪が描いた画をシェアしながら周囲が三溪を慕った様子がうかがえる。

いずれにせよ三溪は、高山寺所縁の作品群によって自己を投影した作を世に問い、芸術家や数寄者と交流を深

図 8 Sakyamuni Descending the Mountain (Seattle Art Museum, Eugene Fuller Memorial Collection)

苦らしいものを加える。衣文と山径は簡略に写す一面、 釈迦の面貌は細筆をもって著しく精密に描くのは、この 図像独自のものではなく、宋元の作品に例のあることで、 恐らく原本の作風を伝えたのであろう。(中略)この墨 画の画風は挿図九五の白衣観音(引用者註:三溪が所蔵 した高山寺印を有する観音像2幅のうち、岩上に座す観 音像。クリーブランド美術館蔵。本稿注30に三溪による 評がある)と極めて近く、同時代の作と思われる¹³¹。」な どとまとめられるものであった。前述のように、既に高 山寺印を有する観音菩薩像2幅を所蔵し、遺香庵への自 作の寄進も行った三溪は、高山寺への関心の高まりに加 めていったことは確かである。それはこの時代の他の古 美術コレクターにはまず見られない、彼独自のアプロー チであった。三溪が遺香庵に寄進した六祖像は、他の寄 進者とはやや異なる意図をもって描かれたことも改めて 理解できる。

本稿の冒頭に挙げた短歌は、高山寺へ参詣した折の実 景であるかは不明である。(前稿で紹介した、堂本印象 が高山寺を描いた作品(前稿図5)に類似する点があり、 絵画的であるため)しかし三溪は、高山寺所縁の作品を 手元に置き、お手本とし、自身の投影として画を描くこ とで高山寺や明恵、そして絵師たちを自らに近しいもの とし続けていたことは間違いないだろう。

おわりに

三溪と高山寺の作品群とのかかわりから、その影響や 三溪の描画における特徴をあぶりだしてみた。三溪は遺 香庵に寄進した作のテーマである「本来無一物」を心に とどめ、この語が具現化した茶碗「無一物」を入手し愛 用した。また、三溪の描いた六祖慧能や明恵、釈迦からは、 苦行や坐禅/冥想、あるいは光彩を放ちカリスマティッ クに崇拝されることよりも、日常の営みを静かに遂行す ることに重きを置いていた様子がわかる。(本稿では触 れなかったが、三溪が描いた「臨済」もまた、松を植え るため鍬を持つ姿¹³⁴で描かれる) それは一種の自画像で あり、2-1の略歴で一端を示したように三溪が「暴れ 馬」と称される生糸業界(価格の乱高下、シビアな海外 交渉)に身を置き、様々な経験を積むなかで得た人生観 135と、蒐集した古美術から流れ出る美によって洗練され た仏教 (美術) 観のあらわれであった。その人生観や 仏教(美術)観は、当時の高名な禅僧たちも高い境地と して認めるレヴェルに達していた。そして作品に自己を 投影するうえで、三溪は周囲の芸術家たちの助力を仰ぐ ケースもあった。三溪の他のジャンルの絵画群について は未勘であるが、三溪が実業界に身を置き、その人生観 が作品にあらわれている以上、今後美術史のみならず経 済史等の専門的見地からの作品のトータルな把握が必要 となる。本稿がその一助となれば幸いである。

本稿は2017年3月発行の紀要に掲載予定であったが、 最終校の段階で「出山釈迦」(図8) の購入時期に関する 資料が見つかり、改稿と出版スケジュールがあわず見送 ることになった。ここに3月出版予定として貴重な資料 を拝見し画像をお借りした諸機関、また紀要編集担当の 各位に深くお詫び申し上げたい。

なお、門外漢ながら三溪や禅を扱う筆者自身の背景に

ついて少し補足しておきたい。三溪については大学時代に東京国立博物館で旧蔵の「孔雀明王像」に出会い、その美に打たれたのがきっかけである。すぐにポスターを買い室内に貼り、念持仏とし関係論文には目を通して現在に至っている。従って筆者にとって三溪はまず、「孔雀明王像」を入手し大切にされた方であり、博物館へおさめられたご家族およびご関係の方々には感謝しかない。加えて三溪の明恵筆跡所蔵の有無に興味があり数年来調べてもきた。後鳥羽院への敬慕等を思えば所蔵されていても不思議ではないのだがいまだ不明であり、今後の最大の課題である。

禅に関しては身内に妙心寺での得度者がいたため、拙宅には『無門関』等の書籍が何冊かあった。手にとったのは高校時代であり、夏には伊深の鬼僧堂として知られる正眼寺で初めての参禅体験を得た。その後縁あって2004年1月の摂心より、愛知専門尼僧堂に定期的に参禅していた。青山俊董老師のご提唱で時々語られる、澤木興道老師の「グループぼけ」「犬的信者、猫的信者」「親分(=釈迦)は野垂れ死に」等の平易だが心に刻み込まれるお言葉は、折に触れて反芻するものである。河村孝道老師、横山紘一師による息の長いご講義も貴重なものだったが、ただ一度だけの須田道輝老師(長崎 天佑寺)との邂逅は老師のまなざしと全人格から出た一言とともに、私の生涯の宝物となっている。

2017年度は「夢記」へのアプローチをメインに考えて いたが、見知らぬ者にも貴重なご所蔵品を快くご披露の うえ、様々なご教示を下さった方々のご厚意で、ささ やかではあるが思わぬ一文をここに掲げることになっ た。特に齋藤清氏には、長年に亘る三溪愛と今後の研究 にとっての書簡の重要性を見据えたお立場からの適切な ご助言や資料のご紹介を賜り、2018年1月には成稿のご 確認とご意見を頂いた。突然の来客の長居にも拘らず温 かくおもてなし下さったご家族の皆様にも心からの感謝 をここに申し上げたい。また、2018年11月には「生誕 百五十年 原三溪 一茶と美術へのまなざし」展(於 畠山記念館)の関連イベントにて清水緑氏より三溪作「飛 燕図」(公益財団法人三溪園保勝会所蔵)が、尾形光琳 「波上飛燕図」(三溪所蔵品)より想を得ているとのご指 摘をうかがった。三溪が所蔵品を手本として作画した例 は他にもみられるとのことで、所蔵品の茶会以外の活用 は興味深いテーマでもある。ここに加筆して深謝申し上

筆者は数年来研究妨害に悩まされ、また執筆中この テーマで良いのか迷うこともあったが、脱稿寸前になっ て前稿で採りあげた大久保・内藤・堂本の三名にも言及できていることに気付き、結果としては良かったのだと思わざるを得なくなった。ご所蔵品の閲覧と掲載等、ご高配を賜った下記の皆様に厚く御礼申し上げる。(五十音順、敬称略)

縣浩一郎、大貫泰子、覚雄山鹿王院、神奈川県立歴史博物館、岐阜市歴史博物館(学芸員:社本沙也香、土山公仁)、木村真実、熊本県立図書館、江西山天徳寺、巨福山建長寺、齋藤清、三溪園(学芸員:清水緑(現 渋谷区立松濤美術館学芸員)、北泉剛史)、報恩禅寺、天龍寺三秀院(栂承昭)、栂尾山高山寺、徳富蘇峰記念塩崎財団(常務理事・学芸員:塩崎信彦)、名古屋市博物館(学芸員:塚原明子、山本祐子)、原三溪市民研究会漢詩部会、原三溪・柳津文化の里構想実行委員会(事務局長:市川春雄)、横浜美術館、Seattle Art Museum(Ashley Mead)、HB Studio (Gerard Nazarian)

【作品データ】

- ・図1 原三溪書簡(縣治朗宛 昭和6年10月26日付 個人 蔵): 所蔵者より画像提供
- ・図2 「六祖搗米図」(原三溪筆 紙本墨画 昭和6年 高 山寺蔵):出典は『三溪画集』第三(「六祖」と 顕す)

賛「菩提本無樹/明鏡亦非台/本来無一物/何 処惹塵埃/大鑑禅師偈三溪写(印)」

箱蓋表「六祖搗米図」

・図3 「六祖大師」(原三溪筆 紙本墨画 昭和7年 個人 蔵): 所蔵者より画像提供

> 賛「菩提本無樹/明鏡亦非台/本来無一物/何 処惹塵埃/大鑑禅師偈/三溪写/(印)」

箱蓋表「六祖大師」

箱蓋裏「呈 縣賢契/昭和壬申二月 三溪(印)」

- ・図4 「大鑑禅師」(下村観山筆 絹本墨画 1917 (大正6) 年原木淳輔氏旧蔵):出典は『KANZAN 第三の 男・下村観山』(駿府博物館 2014 (平成26) 年) 所載の神奈川県立歴史博物館所蔵の『観山遺作 集』ガラス乾版による図版44。この画集では「六 祖」とするが、制作翌年刊行の『観山新作集』(精 華社 1918 (大正7) 年)のタイトル「大鑑禅師」 を採用する
- · 図5 「明恵上人像(持経像)」(絹本淡彩 高山寺蔵):

出典は森暢『鎌倉時代の肖像画』(みすず書房 1971 (昭和46) 年) p.63,64

・図6 「明恵上人画像」(原三溪筆 紙本墨画 昭和6年 名古屋市博物館蔵): 所蔵者より画像提供 箱蓋表「得道」

箱蓋裏「呈森川如春雅契/此図作二葉其一品是也/昭和六年秋十月 原三溪識(印)」 法量61.3×32.8cm

・図7 「出山釈迦」(原三溪筆 紙本墨画 1937 (昭和12) 年 公益財団法人三溪園保勝会蔵): 所蔵者より 画像提供

> 賛「天地晦冥/魍魎跳梁/釈尊出山/天日瞱々/ 三溪写併題/(印)(印)□

箱蓋表「釈尊出山 (印)」

箱蓋裏「呈森川如春雅契/昭和十二年五月 原 三溪(印)」

・図8 (Fig.8) "Sakyamuni Descending the Mountain" (Acc#:50.124, Hanging scroll, mounted in frame; ink on paper, late 13th century, Seattle Art Museum, Eugene Fuller Memorial Collection): 所蔵者より画像提供 (Photographer: Susan A. Cole)

法量:90.8×41.9cm

【文献略称】(五十音順)

- ・縣宮島対談1973: 縣治朗と宮島家栄一 (号は翠華。中央大学で美術史を講ずる。裏千家を嗜み「宮島栄」名での著述も散見される) との対談記録。私家版。1971 (昭和46) 年6月7日から1973 (昭和48) 年2月12日まで31回を数え、宮島が程なくして逝去したため、その子息が文字起こししたもの。
- ・板倉2016:板倉聖哲「梁楷「出山釈迦図」(東京国立博物館)をめぐる諸問題」(『佛教芸術』344号 2016(平成28)年1月)
- ・伊藤2011:伊藤大輔『肖像画の時代 中世形成期にお ける絵画の思想的深層』名古屋大学出版会 2011 (平 成23) 年
- ・円覚寺2018:『釈宗演と近代日本 若き禅僧、世界を 駆ける-』臨済宗大本山円覚寺2018(平成30)年
- · 奥田2015: 奥田勲他『明恵上人夢記訳注』勉誠出版 2015 (平成27) 年
- ・柏木2018:柏木智雄「川面義雄旧蔵原三溪書簡を読む ー『三溪帖』『余技』『三溪画集』編纂と晩年の文化交流」 (『横浜美術館研究紀要』第19号 2018 (平成30) 年3月)

- ・金井1997:金井紫雲『東洋画題綜覧』国書刊行会 1997(平成9)年(芸艸堂1941(昭和16)-1943(昭和18)年)の合本複製版)
- ・齋藤清2014: 齋藤清『原三溪 偉大な茶人の知られざる真相』淡交社 2014 (平成26) 年
- ・斎藤隆三1977: 斎藤隆三『画題辞典』国書刊行会 1977(昭和52)年(博文館1925(大正14)年の復刊)
- ・三溪園2006: 財団法人三溪園保勝会『三溪園100周年 原三溪の描いた風景』神奈川新聞社2006 (平成18) 年
- ・清水2012:清水緑「原三溪の旧蔵品と三溪園」(『論集・東洋日本美術史と現場』編集委員会編『論集・東洋日本美術史と現場:見つめる・守る・伝える』竹林舎2012(平成24)年)
- ・田中2007:田中良昭『慧能 禅宗六祖像の形成と変容』 臨川書店 2007 (平成19) 年
- ・名古屋市博物館2008:名古屋市博物館他『茶人のまな ざし森川如春庵の世界』2008(平成20)年
- ・**藤本2009**: 藤本實也『原三溪翁伝』思文閣出版 2009 (平成21) 年
- ・原三溪展実行委員会2014:原三溪展実行委員会『岐 阜が生んだ原三溪と日本美術一守り、支え、伝える』 2014(平成26)年
- ・矢代1984:矢代幸雄「三溪先生古美術手記」(『忘れ得ぬ人びと(矢代幸雄美術論集 I)』岩波書店 1984(昭和59)年)

【前稿正誤表】(r= ページ右欄、I= ページ左欄)

- · p.33r ②, p.34l ⑥:大日本茶道協会→東京茶道協会
- · p.341 ⑥: 5,454円60銭→9,681円24銭
- ·p.40表 1:安田靭彦→安田靫彦

「**画家名**:安田靫彦」の項に「**タイトル**: 明恵上人 **明恵のポーズ**:土饅頭様の盛られた土の間に座す。右耳を見せ左手に数珠を持つ **法量等**:4尺2寸5分×1尺3寸8分、絹本着色 **典拠**:静岡市麓山居並某旧家所蔵品入札 東京美術倶楽部 昭和10年4月22日」

「洛中洛南十二景勝」→「洛中洛外十二景勝」

· p.431:近世→室町以降

註

1 原富太郎 (三溪) 作の漢詩・短歌類を収めた『三溪集』 (1951 (昭和26) 年 非売品) 所収。三溪長女の西郷 春子が三溪の十三回忌に発刊を計画、親交のあった

- 朝比奈宗源(平等軒、円覚寺派管長等)が遺稿を整理し序と後記を執筆、和辻哲郎が校正と装丁を行った。後記によれば、「古人**迂**第一集」は三溪自身が清書したもので、第二集に「自大正十二年至大正十四年」とあるため、1923(大正12)年以前の作と考えられる。この短歌は山本三生『新万葉集 補巻』(改造社 1939(昭和14)年)にも再録された。
- 2 「高山寺明恵上人七百年遠忌点描一大久保利武・内藤虎次郎(湖南)・堂本印象一」(『名古屋文理大学 紀要』17号 2017 (平成29) 年3月)。J-stage より図表を含む全文が閲覧可能(予定)。正誤表は本稿末尾に示した。
- 3 『熊倉功夫著作集 第四巻 近代数寄者の茶の湯』思 文閣出版 2017 (平成29) 年
- 4 『遺香庵寄進顛末』1931 (昭和6) 年。高橋が記した明恵上人七百年遠忌事業に関する文章が収録されたものだが、『昭和茶道記』所収の同タイトルの文章とは若干の異同がある。以下、高橋の記録の引用に関しては同書による。
- 5 『高山寺寄進顛末』に写真が掲載される。奥田2015 所収の「目録」4-3-Bの[公刊]に追加すべき内容。
- 6 「喩事喩理ノココロヲオモヰ□リテ」が略される。
- 7 「小塩とは此山中(引用者註:栂尾高山寺)の名所なりといふ」(『十三松堂日記』第二巻中央公論美術出版1965(昭和40)年 p.895 昭和6年11月11日条)
- 8 高山寺石水院南縁に掲げられた額の文字。額の原字は後鳥羽院の宸翰と伝えられる。
- 9 『三越』昭和6年11月
- 10 本名は茂太郎。大和絵師である父の有美より絵を学び、書家の多田親愛より書を学ぶ。古筆研究に造詣が深く「平家納経」等の復元模写を担当した。
- 11 号「観空庵」。浜松銀行頭取、共同保全会社社長等。
- 12 号「如春庵」等。愛知県一宮市の素封家。
- 13 号「紫明庵、無塵庵、有髮尼」。益田孝夫人。
- 14 号「魯堂」。数寄屋建築家。
- 15 号「心斎、百華」。浄土真宗本願寺派第22世法主である大谷光瑞の弟、拓務大臣等。
- 16 号「泰山」。本名は高泰。幼名「守之助」を後にも使用。 三井永坂町家第8代当主。三井物産社長等。
- 17 号「松下軒」。愛知銀行(東海銀行(三菱 UFJ 銀行) の前身)発起人。
- 18 三溪園保勝会編『原三溪と美術 蒐集家三溪の旧蔵 品』(2009 (平成21) 年)、藤本2009、清水2012、齋 藤清2014等。②以下も同様。

- 19 清水2012
- 20 「美術品ハ共有性ノ物ナルヲ以テ、自他ノ別アルヲ 許サズ」(『三溪帖』(後述)、矢代1984所収)
- 21 清水緑「下村観山と原三溪にみる作家と支援者の関係」(藤本2009 所収)、三上美和『原三溪と日本近代美術』国書刊行会 2017 (平成29) 年 等。
- 22 公益財団法人三溪園保勝会『三溪園所蔵品図録』 (1999(平成11)年)図版18。箱蓋表に「鳥獣戯画 模写 三溪先生」の墨書があり、別面に「第(「村田」 朱印)号」の貼紙があるため、原家執事の村田徳治 が整理したものと考えられる。(2017(平成29)年 12月26日熟覧)高山寺所蔵の巻子本とはモチーフの 順序が異なり、途中までの模写である。模写年次の 記載がなく料紙も2種類使用するなど、模写の場が 高山寺か展覧会か、あるいは図版を見ながらのもの であったのか判然としがたい。今後の検討が俟たれ ろ
- 23 以上三溪園2006、藤本2009等
- 24 齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク一茶の湯を愛 した実業家たちー』思文閣出版 2012 (平成24) 年
- 25 幅物326点、巻物10カット、帖39枚、壁画1面、屏風 5点、書67点、写経6巻を収録する。(藤本2009 p.652)
- 26 以下の文献を参考にした。三溪園2006、藤本2009、 齋藤清2014、柏木2018、円覚寺2018、森本宋『原富 太郎』時事通信社 1964(昭和39)年、原三溪展実 行委員会 2014
- 27 舟橋満『木版画王 川面義雄』1978(昭和53)年 には「策山」とのみ記す。「冬山」は同時代の漆工家である河面冬山との混同か。
- 28 柏木2018には昭和3年とするが、齋藤清氏のご教示 に従う。
- 29 1895 (明治28) 年、鈍翁が入手した弘法大師空海筆『崔子玉座右銘』を披露する茶会を品川御殿山の本邸碧雲台で開催したことから始まった会。会のメンバーになることが、特に財界におけるステイタスとされた
- 30 「原家什宝陳列目録」(大正7年4月14日)。三溪の古 美術品購入記録のうち、観音菩薩像は高山寺印のあ る2幅のみが記される。この大会には「孔雀明王像」 「閻魔天像」「清瀧権現像」「雪舟筆山水画巻」といっ た、三溪コレクションの代表作が陳列されており、 三溪自身が「意気円達、筆力自在、恰モ流水ノ極リ ナキガ如シ。其筆趣極メテ高山寺鳥獣絵巻物ノ筆者 ノ流暢自在ナルト、意気極メテ通ズ。余ハ恐ラク同

- 一筆者ナラント思フ」(矢代1984) と評した高山寺 印のある「観世音菩薩像」と考えるのが妥当であろ う。
- 31 『三申小泉氏愛玩品入札』(東京美術倶楽部 昭和9年 11月15日)。なお筆者が参照した入札目録には「798」 と高値が記入されている。この入札の折、松永安左 エ門(耳庵)は玄証本「十六善神図像」一巻(高山 寺印あり)を仰木(政斎か)経由で入手しており、 三溪がこの入札の開催を知らなかったとは考えにく い。
- 32 東京朝日新聞および読売新聞朝刊 (4月5日)、『皇室 の至宝 東山御文庫御物 5』毎日新聞社 2000 (平成 12) 年 図版88~95、174・175解説
- 33 『伯林日本古美術展覧会記念図録』上・下 大塚巧藝社 1939 (昭和14) 年。この展覧会に関しては、安松みゆき『ナチス・ドイツと〈帝国〉』(吉川弘文館2016 (平成28)年)に詳しい。
- 34 田山方南「高山寺遺香庵のお茶」(『美術』81号 1955 (昭和30) 年9月20日)。寄付に三溪筆「六祖図」、床 幅に高山寺蔵「明恵上人基光対面図」。鈍翁の茶杓 (「遺香」)、仰木魯堂および益田多喜子の茶碗等、寄 進された道具類が使われた。なお、この記事によれ ば三溪は「観音図」(観音経か) も高山寺に寄進し ている。
- 35 高橋義雄『東都茶会記 三』「大正5年5月25日為樂庵 不昧忌」(淡交社 1989 (平成元) 年)、『敬和会茶会記』 「第33回 大正13年3月14日」(名古屋市博物館2008)。 鈍翁逝去後、益田貞子(鈍翁子息である太郎の夫人) が催した供養返礼の茶席にもこの軸は掛けられた。 (『日本之茶道』5-7 通巻81 1939 (昭和14) 年7月)
- 36 吉津宜英『華厳禅の思想史的研究』大東出版社1985 (昭和60) 年
- 37 田中久夫『明恵』吉川弘文館 1961 (昭和36) 年等。 夢窓疎石門下による関与が指摘される。
- 38 大阪朝日新聞京都版 昭和6年11月19日等。また、徳 富蘇峰記念館所蔵の土宜覚了(高山寺住職)書簡(池 上幸二郎宛、昭和6年9月4日付)の封筒には、明恵 上人奉賛会の「事務所」として大雲院(浄土宗、京 都市内)の住所が印刷されている。前稿でもふれた が、明恵は法然を菩提心の点等から批判し浄土宗側 からの反論が続いた歴史を考慮すると、明恵上人奉 賛会の規模の大きさが理解出来る。なお、大雲院に 当時の資料の有無を尋ねたところ、ないとのことで あった。(2017年8月29日電話にて確認、録音有)

- 39 畠山記念館にも沢庵に因む棗が蔵されるほか、1921 (大正10) 年4月、森川に贈った小田原別邸掃雲台の 老松の棗や1935 (昭和10) 年1月、松永に贈った利 休好みの棗等が知られる。(武内範男「渡辺喜三郎 代々とその作品」(『なごみ』24-2 278号 2003 (平成 15) 年2月)、名古屋市博物館2008 図版35、鈴木皓 司『近代茶人たちの茶会』淡交社 2000 (平成12) 年)
- 40 鈍翁と沢庵については「常に三齋(引用者註:細川 忠興)、沢庵の茶事応答歌の幅を掛けて茶をせられ た」(柳瀬荘主人(引用者註:松永耳庵)「鈍翁流茶 道の創始」(『日本之茶道』5-12、通巻86、1939(昭 和14)年12月)、「鈍翁と沢庵は兄弟分」(同5-3、通 巻77、p.22昭和14年3月)といったコメントが散見 される。
- 41 同じ銘の茶碗が阪急文化財団に蔵される。
- 42 日本におけるファン・ゴッホの初出文献は、1910 (明 治43) 年5月、森鷗外とされる「無名氏」による「む く鳥通信」(『スバル』第2年第5号)とされ、その後『白 樺』を中心として武者小路実篤や柳宗悦らによる紹 介が続いた。他にもファン・ゴッホの弟テオの子息 は大正年間に日本に滞在したことや、千家元麿が「星 月夜」を詠み込んだ詩「ゴオホ礼賛」等を投稿した ことが指摘されている。(木下長宏『思想史として のゴッホ 複製受容と想像力』学芸書林 1992 (平成 4) 年、原田平作「日本とファン・ゴッホ、その序 論的考察」(『待兼山論叢』美学編 29 1995 (平成7) 年)等)また、『ゴッホ展 巡りゆく日本の夢』(NHK 他 2017 (平成29) 年)には大正から昭和初期にフ ランスやオランダで作品を実見した日本人たち (200 名以上) に関する資料が掲載されている。
- 43 田中親美「原三溪先生を想ふ」『日本之茶道』5-9、 通巻83、昭和14年9月
- 44 駒澤大学禅宗史研究会『慧能研究』大修館書店 1978 (昭和53) 年
- 45 『鳴沙余韻』岩波書店
- 46 『金剛経と六祖壇経の研究』貝葉書院 1913 (大正2) 年
- 47 『禅学研究』17·18号 同年3月·7月
- 48 安宅彌吉 (第12代大阪商工会議所会頭等)の出版援助による。
- 49 『燉煌出土荷沢神会禅師語録・燉煌出土六祖壇経・ 興聖寺本六祖壇経』森江書店
- 50 以上『講座敦煌 8 敦煌仏典と禅』 I 総説 大東出版 1980 (昭和55) 年、佐藤悦成「『敦煌新本 六祖壇経』

- 試訳 (一)」(『禅研究所紀要』23 1995 (平成7) 年3月) 等を参照した。
- 51 於護国寺月光殿。出品者は團琢磨·前山久吉。(『大師会会記』昭和6年4月26日)
- 52 田中2007、齋藤智寛「**基**のない鏡ー『六祖壇経』呈 心偈考一」(『集刊東洋学』101号 2009 (平成21) 年 5月 所収)、山田無文『無文全集 第6巻 六祖壇経』 禅文化研究所 2004 (平成16) 年、中川孝『六祖壇 経 禅の語録4』筑摩書房 1976 (昭和51) 年 を参照 した。
- 53 井上禅定『釈宗演伝』禅文化研究所 2000 (平成12) 年、 円覚寺2018
- 54 古川堯道(毒狼窟、円覚寺派管長等)の渡米送別会での祝辞で、野村は①オルコット大佐訪日の折、通訳をつとめた②霊松院中学(岐阜県、臨済宗)で英語教師となった折の弟子の一人が間宮英宗である③シカゴ万国宗教会議に参加する釈宗演の通訳、その後ヨーロッパに渡った土宜法龍(高山寺住職、高野山金剛峯寺座主等)の通訳をつとめ、その後は独りでインドを経由して帰国した④鈴木大拙との交友、といった自己紹介を行っている。(「古川老大師の御渡米を祝す」『大乗禅』8-7、83号、昭和6年7月)
- 55 『大乗禅』7-8、84号、昭和6年8月
- 56 東慶寺には三溪筆「香魚図」一幅が蔵されてもいる。 (円覚寺2018 図版7-11)
- 57 安田靫彦「箱根の茶会」(『心』平凡社 1960 (昭和 35) 年)等。谷川徹三は「三溪ゼミナール」と称し ている。(「三溪先生讃」『明治村通信』166 昭和59 年4月)
- 58 なお、所蔵者にこの書簡と関連する書簡の有無を尋ねたが、ないとのことであった。(2017年9月21日 電話にて確認)また、縣には自筆の日記があるが、 閲覧していない。日記には更に詳しい事情が記されている可能性がある。
- 59 縣治朗「外務省提出/縣治朗略歴控/三通」、『縣治 朗作品展』(1979 (昭和54) 年1月9日-15日 於 日本 橋三越本店六階工芸サロン)、縣宮島対談1973、斎 藤清2014、柏木2018等を参照した。
- 60 齋藤清氏のご教示による。
- 61 スチール蒔絵とは、鉄板に砂子、切箔をもって蒔絵 するもの。吉田五十八(建築家、東京美術学校教授) の発想による。
- 62 縣宮島対談1973。鷲尾の駒澤大学での教歴は1901(明 治34) 年にまで遡り1940(昭和15)年まで断続的に

続くが、縣の経歴と重なるのは、1919 (大正8) 年7 月以降1940 (昭和15) 年までである。(駒澤大学『駒 澤大学百年史』上卷 昭和58年)

- 63 「大乗禅の発刊に際して」(『大乗禅』創刊号)
- 64 8-5、81号、昭和6年5月。同年3月の興禅護国会での 談話の筆録。
- 65 書簡に「二部」とあることと、書簡の内容に適した ものが管見の限りでは一冊のみのため、縣は一冊を 二部、三溪に送付したと解釈した。
- 66 3-10・11、25号・26号、1926 (大正15) 年10・11月 および4-12、39号、1927 (昭和2) 年
- 67 5-3、43号、1928 (昭和3) 年4月および8-7、83号、昭和6年7月。野口里城と無名氏によるそれぞれ300 字程度の解説がある。
- 68 『栂尾山高山寺明恵上人』緒言 p.1
- 69 竹田黙雷「禅と不老長生」(『大乗禅』2-6、9号 (1925 (大正14) 年6月) や前述の若槻礼次郎による寄稿等。
- 70 報恩禅寺(曹洞宗、熊本市)第17代住職。1953(昭和28)年示寂。
- 71 なお、同様の比較が高瀬武次郎『陽明学叢話』成象 堂 昭和7年(序は昭和6年8月11日)にも見える。同 書では、「神秀の偈は漸教的にして四有的四言教に 比すべく、慧能の偈は頓教的にして四無的四言教に 比すべし」「緒山の悟は龍溪に及ばざれども王子は 却て緒山の悟を以て普及すべき教と為し龍溪の悟は 顔子明道も敢て承当せざる所なり上智の人は世に遭 ひ難しと戒められたり」等と記す。
- 72 釈宗演は、師である今北洪川(蒼龍窟、円覚寺派管長) が儒仏一致を説いた書『禅海一瀾』を1884(明治 17)年より講義しており(円覚寺2018、『禅海一瀾 講話』(岩波書店 2018(平成30)年)等)、三溪は 既にこのような解釈に親炙していた可能性が高い。
- 73 恐らく子罕第九の「子絶四。毋意、毋必、毋固、毋 我」を指す。朱子『論語集注』によれば、孔子には 4種(私意、必を期す(=無理押し)、執滞(=固執)、 私己)の欠点がないという。「四絶」は『西郷南洲 遺訓』でも言及されるなど、近代の日本でも広く知 られていた。
- 74 飯田在学中の1877-1886 (明治10-19) 年はこの名称 であった。その後「帝国大学」となる。
- 75 飯田欓隠『禅友に与へるの書』大東出版 1943 (昭和18) 年、井上希道『無無無』致知出版 2016 (平成28) 年等
- 76 「半満」は、半字教(小乗)と満字教(大乗)、「円頓」

- は円教(完全な教え)と頓教(速やかな成仏を説く教え)、「大小」は大乗と小乗、「権実」は権教(方便としての教え)と実教(真実の教え)を指す。
- 77 田山方南『大徳寺』(秘宝 第11巻) 講談社 1968 (昭 和43) 年
- 78 矢代1984
- 79 矢代1984
- 80 六祖像は基本的には寺院に所蔵されるが、寺院外で 茶席に用いられた例が江戸時代の資料に散見され る。谷晃「研究資料 茶会記に現れた絵画」(『美術 研究』362号 1995 (平成7) 年3月) に「秋月五祖六祖」 「主馬 (=狩野尚信:引用者註) 六祖」「雪舟五祖六 祖」「雪舟六祖図」「探幽大軸六祖絵」「松花堂六祖絵」 が挙げられる。
- 81 https://www.nagaragawagarou.com/sakuhin/inshou-a1000.html の作例がある。
- 82 谷口鉄雄「一隻眼の大鑑禅師像」(『東洋美術論考』 中央公論美術出版 1973 (昭和48) 年)、同「禅宗六 祖像について一豊後・円福寺本を中心に」(『東洋美 術研究』中央公論美術出版 1994 (平成6) 年) 等に 分析がある。
- 83 斎藤隆三1977
- 84 金井1997
- 85 金井1997
- 86 金井1997
- 87 『欧米蒐蔵日本美術図録』繭山龍泉堂 1966 (昭和 43) 年 図版172
- 88 京都国立博物館他『海北友松』2017 (平成29) 年 図版62
- 89 https://terebess.hu/zen/sengai.html
- 90 鷲山樹心「秋成と嵯峨三秀院」(『文芸論叢』18号 1982 (昭和57) 年3月) に六祖像のみ写真が掲載さ れる。
- 91 恩賜京都博物館『蘆雪名画選』芸艸堂 1937 (昭和 12) 年、『蘆雪**潑**剌-和歌山草堂寺と紀南の至宝』 和歌山県立博物館 2016 (平成28) 年
- 92 『花雨翠居並某家所蔵品展観入札』(東京美術倶楽部 昭和9年5月3日) には「高橋家伝来」と記載
- 93 https://www.metmuseum.org/art/collection/search/73193
- 94 『花雨翠居並某家所蔵品展観入札』(東京美術倶楽部 昭和9年5月3日) には「高橋家伝来」と記載
- 95 "A Legendary God" 画面右に向かって経典を破る。 (日本美術院編『チェッコスロバキヤ絵画展覧会日

- 本美術院同人作品集』大塚巧藝社昭和5年1月)
- 96 『河鍋暁斎画集 1 本画・画稿』 六耀社 1994 (平成6) 年
- 97 『日本美術画報』5-3 1898 (明治31) 年9月
- 98 『男爵関家旧江戸五人衆某家御所蔵品展観入札』東京美術倶楽部 大正5年12月14日。 賛は江月宗玩『欠 伸稿』には掲載されない。
- 99 『某市某家所蔵品入札』東京美術倶楽部 昭和5年10月13日
- 100『千松軒某家蔵品入札』東京美術倶楽部 昭和14年6 月26日
- 101『日本美術』104号 1907 (明治40) 年10月
- 102「巨星・原三溪翁を偲ぶ」(『蚕糸経済』11巻120号 1939(昭和14)年9月)。なお野村洋三にも、釈宗演 の法話を「世の中のすべての事象は、それがそうあ ることが自然であって、そのように感得されるとこ ろに仏性を見出せば、よいのではないか」と理解し たことを聞いた釈宗演が「お前さん、もう坐禅など いらないよ。それでいいんだ、それで…」とコメン トしたエピソードが伝わる。(白土秀次『野村洋三伝』 私家版 1963(昭和38)年)
- 103 ただし、三溪は六祖慧能を観山のように書を持つ姿では描いていない。三溪は、文字の読み書きができない慧能(の伝)を理解したうえで制作したと考えられる。
- 104「下村観山画伯蒐集の古美術品」(『文芸時報』昭和3 年2月9日)
- 105 三溪は縣を通じて田中親美から資料を得ている可能性もある。
- 106 柏木2018に川面からの制作上の助言に関する書簡が紹介されている。
- 107 齋藤清2014によれば、まとまった額の購入は「無一物」購入前は1927 (昭和2) 年の瓢花入(銘「老茄子」)を2617円で購入したのみで、「無一物」購入後も1937 (昭和12)年の実朝筆「日課観音」を3590円で購入したのみと、前後にブランクがあり、購入金額にも大きな隔たりがある。
- 108「三溪園田舎家茶事 昭和十二年三月二十八日」(粟田有声庵編『茶道三年』中巻 飯泉甚兵衛 1938 (昭和13)年)
- 109『名碗は語る』世界文化社 2015年
- 110 原三溪実行委員会2014図版43等。なお、2017年に原 三溪記念室(岐阜市)にて「加納鉄哉と三溪コレク ション」が開催された。未見であるが作品リスト等

- からは、館蔵品を中心とした鉄哉作品が展示され、 鉄哉の古美術への造詣の深さと幅広い作風がうかが える。
- 111 他に虚無僧や木食、松花堂昭乗、西行が描かれたが、 木食は山中の家の前に小さく描かれるのみで、松花 堂や西行は僧侶というよりは風流人として評価さ れ、描かれている。
- 112 矢代幸雄『芸術のパトロン』新潮社 1958 (昭和33) 年 等
- 113 森暢『鎌倉時代の肖像画』みすず書房 1971 (昭和 46) 年
- 114 東京大学史料編纂所所蔵台紙付写真 -609-8088
- 115 伊藤2011
- 116『古典籍展観大入札会目録』(東京古典会 平成18年 11月19・20日) に「明恵上人像」一幅(鎌倉末期写 彩色 田山方南箱書) が掲載されるが、本像を指すか。
- 117「解脱上人·明恵上人伝絵(探幽縮図)」(京都国立博物館蔵)、「明恵上人聴琵琶図」(恩賜京都博物館『多米知佳画集』便利堂 1929 (昭和4)年)
- 118 なお、「茶の由来展」でもこの肖像が展示されたよ うである。(『三越』昭和6年11月)
- 119『夢記』には明恵が誦経を重視したことが記される。 (樋笠逸人「明恵上人『夢記』の文殊現形記事について一高山寺本第一篇からの小考一」(『鹿園雑集』 20号 2018 (平成30) 年3月))
- 120 伊藤2011
- 121 田中2007
- 122『三溪画集』第三所収。なお目次の「明恵上人東京高橋氏蔵」は、三溪の顧問弁護士でもあった高橋捨六であるとのご指摘を齋藤清氏より頂いた(2017年10月19日メールにて)が、高橋捨六はこの時すでに他界しており、遺族に遺香庵への寄進者がいないこと、また箒庵は他にも三溪より自筆画(「弧雁」)を贈られており、それが「明恵上人」と同じ『三溪画集』の第三(=昭和6年)に載る(粟田天青「高橋箒庵翁の「国宝那智瀧之図」物語」(『日本之茶道』3-121937(昭和12)年12月)こと、さらに明恵との関係を考慮すれば、高橋箒庵へ贈られたものと判断してよいだろう。
- 123 三溪の作品で同じ内容の場合、落款のない方が先に 描かれたのではないかとするご教示を齋藤清氏より 頂いた(2017年9月12日、対面にて)が、このケー スには該当すると思われる。
- 124 横浜美術館蔵(原三溪 自筆書簡(川面義雄宛、昭

和6年10月24日付)2015-M-016)。柏木2018に翻刻が 掲載されている。

- 125 納入文書より。
- 126 三溪が森川に贈った「高野の巻」は水に濡れる等の 理由で『三溪画集』への掲載がかなわず、現在所在 不明である。(齋藤清2014)
- 127 奈良康明「釈尊「六年苦行」をめぐって」(愛知学院大学『禅研究所紀要』44号 2016 (平成28) 年3月) 等参照。
- 128 板倉2016
- 129 田中一松・米澤嘉圃『水墨画大系/第一巻 白描画から水墨画への展開』講談社 1975 (昭和50) 年
- 130 島田修二郎『島田修二郎著作集一 日本絵画史研究』中央公論美術出版 1987 (昭和62) 年
- 131 藤本2009 p.640。1928(昭和3)年2月2日、ホテルニューグランドにおける座談会。
- 132 伏し目がちな出山釈迦像は、既に井村方外によって描かれ、自身による出山釈迦観が記されている。(「出山の釈迦について」『大乗禅』1-3、1924 (大正13)年12月)もしかすると、井村によるこの画も、三溪は目にしたかもしれない。
- 133 1937 (昭和12) 年7月16日付。齋藤清2014に一部翻 刻が掲載される。
- 134『臨済録』序「臨済栽松」
- 135 一例として、三溪の備忘録である『随感録』に記載された以下の文章を挙げる。「(諸葛亮:引用者註) 孔明が文武の大材を抱きながら自ら進んで功名を人に求むるを欲せず、若し三顧の労に逢はずんば平然として一生を南陽無名の一老儒を以て終りしならん。彼が如此冷然功名を見るの大度量に推服たり。(中略) 又天爵人爵の説を聞て天爵の貴ぶ可く、人爵を望むは功利の徒たりを信ぜり。」(藤本2009 p.544)